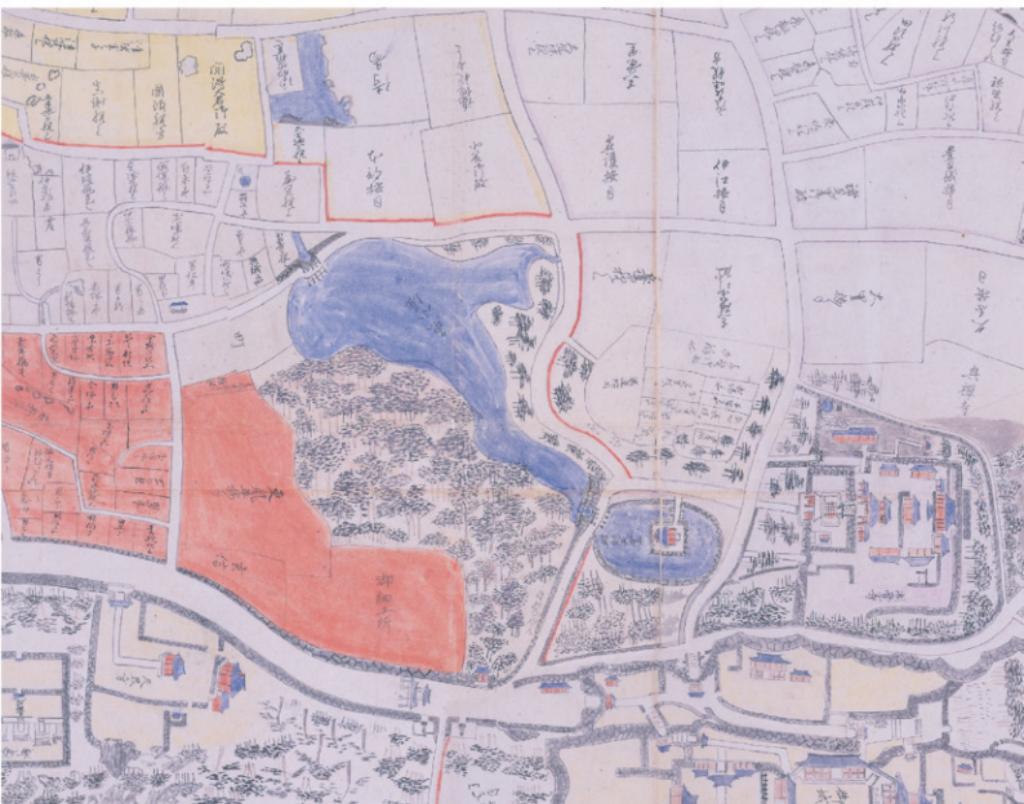


# 松崎馬場跡

— 県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1) —



平成29（2017）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 松崎馬場跡

— 県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1) —

平成29(2017)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



# 序

本報告書は、県営首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成21(2009)・平成23(2011)年度に松崎馬場跡の遺構確認調査を実施し、平成28(2016)年度にまとめたものです。

松崎馬場跡は龍潭の北東側に面する広場で、国学・孔子廟の西側に位置していました。明治12(1879)年の琉球処分前まで冊封使を歓待する重陽宴に伴う爬龍船を観覧する広場として使われていました。また、松崎馬場の西端には、15世紀頃に設置された宿道が通っていました。

このように松崎馬場は近世まで冊封使を歓待する重要な場として、そして主要街道である中頭方西海道の一部として使用されていましたが、近代に入ると国学・孔子廟跡に沖縄師範学校が設置されたことにより、敷地が縮小されるなどの改変が行われました。

更に昭和20(1945)年の沖縄戦とその後の琉球大学、沖縄県立芸術大学の設置によって周辺地形が改変されました。

今回、県営首里城公園の一部として復元整備を行う目的で遺構の確認調査を行ったところ、松崎馬場の整地層や造成層、中頭方西海道に関連する遺構が確認されました。この成果を踏まえて、将来的に更なる遺構確認調査と復元整備を行っていくこととなります。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成29(2017)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 金城 亀信





巻頭写真1 中城御殿前から望む戦前の松崎馬場（左側）とその周辺（那覇市歴史博物館蔵）



巻頭写真2 現在の松崎馬場跡全景



卷頭写真3 松崎馬場跡全景（北から）



卷頭写真4 松崎馬場跡 A トレンチ床面検出状況

## 例　言

1. 本書は、県営首里城公園の整備に伴い、2009(平成21)年度と2011(平成23)年度に実施した松崎馬場跡の埋蔵文化財発掘調査について2016(平成28)年度に資料整理作業を行い、報告書としてまとめたものである。
2. 発掘調査、資料整理作業共に沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受けての実施である。
3. 資料整理作業にあたり調査体制の項で記した多くの方々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標値は、全て世界測地系に基づくものである。
5. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25000地形図を利用した。
6. 本報告書に掲載した航空写真は、国土地理院93OKINAWA49-12を用いた。
7. 本書に掲載した『冠船之時御座構之図』は沖縄県立博物館から、『首里古地図』は沖縄県立図書館から提供していただいた画像を用いた。
8. 本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、琉球大学附属図書館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄県公文書館、那覇市の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。
9. 本書に掲載した調査時の写真撮影は山本正昭、羽方誠、大堀皓平が行い、出土遺物の写真撮影は領家範夫、安里小弥子が行った。
10. 本書に掲載した遺構図は、山本正昭、羽方誠の指示のもと、大堀皓平、宮城明恵、宮里智恵のほか、2009,2011(平成21,23)年度発掘調査作業員により作成した。
11. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの協力のもと山本正昭が行い、各章の執筆は次のとおり行った。

山本正昭 第1章 第2章 第4章第1,2節 第5章第1節 第6章 第7章  
羽方 誠 第4章第3節 第5章第2節
12. 各章で参考・引用した文献の一覧は、巻末にまとめて掲載した。
13. 本発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

## 目 次

序

巻頭写真

例 言

<b>第1章 調査の経緯</b>	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b>	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
<b>第3章 調査経過</b>	9
第1節 発掘調査	9
第2節 資料整理	12
<b>第4章 層序</b>	17
第1節 基本層序	17
第2節 2009（平成21）年度調査	18
第3節 2011（平成23）年度調査	21
<b>第5章 遺構</b>	25
第1節 2009（平成21）年度	25
第2節 2011（平成23）年度	25
<b>第6章 遺物</b>	28
<b>第7章 総括</b>	49
<b>参考文献</b>	52
<b>報告書抄録</b>	53

## 図 目 次

図 1 沖縄本島の位置 .....	5	図 17 中国産青磁 .....	38
図 2 松崎馬場跡の位置及び周辺の遺跡 .....	6	図 18 中国産染付 .....	38
図 3 松崎馬場跡位置図 .....	7	図 19 本土産白磁 .....	38
図 4 『御冠船御座構之図』重陽宴松崎之図 .....	7	図 20 本土産磁器 .....	38
図 5 「重陽宴松崎之図」に見られる松崎馬場の施設 .....	8	図 21 本土産染付 .....	38
図 6 首里古地図に描かれる松崎馬場 .....	8	図 22 本土産色絵 .....	38
図 7 2009(平成21)年度調査区図 .....	11	図 23 本土産陶器 .....	38
図 8 2011(平成23)年度調査区図 .....	12	図 24 沖縄産旋釉陶器 .....	38
図 9 松崎馬場跡発掘調査区図 .....	13	図 25 沖縄産無釉陶器 .....	38
図 10 2009(平成21)年度調査区内2~5層範囲図 .....	20	図 26 円盤状製品 .....	39
図 11 2009(平成21)年度土層断面図 .....	22	図 27 銭貨 .....	39
図 12 2011(平成23)年度土層断面図 .....	23	図 28 大和系瓦 .....	39
図 13 B,C,Nトレンチ 出土遺物 .....	30	図 29 明朝系瓦 .....	39
図 14 表土出土遺物(1) .....	32	図 30 サーベル .....	39
図 15 表土出土遺物(2) .....	34	図 31 松崎馬場跡内を通る宿道想定図 .....	50
図 16 2011(平成23)年度調査出土遺物・サーベル .....	36	図 32 首里古地図に見られる宿道 .....	51
		図 33 宿道想定図並びに調査対象区域(太枠内) .....	51

## 写 真 目 次

卷頭写真1 中城御殿前から望む戦前の松崎馬場(左側)とその周辺(那覇市歴史博物館蔵)

卷頭写真2 現在の松崎馬場跡全景

卷頭写真3 松崎馬場跡全景(北から)

卷頭写真4 松崎馬場跡Aトレンチ床面検出状況

写真 1 明治期の松崎馬場跡と龍潭橋 .....	8	写真 16 1989(平成元)年度調査区再検出(北から) .....	14
写真 2 戦前の松崎馬場跡 .....	8	写真 17 Bトレンチ表土層除去後 .....	19
写真 3 戦後の龍潭護岸工事状況 (上部が松崎馬場跡) .....	9	写真 18 Bトレンチ堆積状況(東から) .....	19
写真 4 1960年代の松崎馬場跡遠景 (左が松崎馬場跡) .....	9	写真 19 Nトレンチ西壁北側 .....	21
写真 5 現在の松崎馬場跡遠景(北から) .....	9	写真 20 Nトレンチ西壁東側 .....	21
写真 6 現在の松崎馬場跡遠景(南西から) .....	9	写真 21 トレンチ1西壁 .....	23
写真 7 伐開作業状況 .....	10	写真 22 トレンチ1東壁 .....	24
写真 8 伐開後状況 .....	10	写真 23 トレンチ2東壁 .....	24
写真 9 実測作業状況 .....	10	写真 24 トレンチ2東壁 .....	24
写真 10 埋め戻し後状況 .....	10	写真 25 碓敷き検出状況全景(南から) .....	25
写真 11 調査区伐開前状況 .....	10	写真 26 碓敷き近景 .....	25
写真 12 表土層掘削作業状況 .....	10	写真 27 道跡全景(南から) .....	26
写真 13 遺構検出作業 .....	12	写真 28 道跡の縁石 .....	26
写真 14 埋め戻し後状況 .....	12	写真 29 集石1(南西から) .....	26
写真 15 2009(平成21)年度調査区全景(東から) .....	13	写真 30 集石2 .....	27
		写真 31 石積み(南から) .....	27
		写真 32 石積み上面 .....	27

写真 33	B,C,Nトレンチ 出土遺物	31	写真 36	2011(平成23)年度調査出土遺物・サーベル (右上:佩鑰、右下:鍔)	37
写真 34	表土出土遺物(1)	33			
写真 35	表土出土遺物(2)	35	写真 37	貝類・脊椎動物遺体	40

## 表 目 次

表 1	2009,2011(平成21,23)年度層序対応表	18	表 16	貝類(巻貝等)出土状況	46
表 2	出土遺物観察表(1)	28	表 17	貝類(二枚貝等)出土状況	46
表 3	出土遺物観察表(2)	29	表 18	ニワトリ出土状況	46
表 4	2009(平成21)年度遺物出土状況	41	表 19	イヌ出土状況	46
表 5	青磁出土状況	41	表 20	イノシシ出土状況	46
表 6	白磁出土状況	41	表 21	種不明出土状況	46
表 7	染付出土状況	42	表 22	2011(平成23)年度遺物出土状況	47
表 8	その他中国産陶磁器出土状況	42	表 23	中国産陶磁器出土状況	47
表 9	その他陶磁器出土状況	42	表 24	本土産陶磁器出土状況	47
表 10	本土産陶磁器出土状況	42	表 25	沖縄産施釉陶器出土状況	48
表 11	沖縄産施釉陶器出土状況	43	表 26	沖縄産無釉陶器出土状況	48
表 12	沖縄産無釉陶器出土状況	43	表 27	陶質土器出土状況	48
表 13	土器・陶質土器・瓦質土器出土状況	44	表 28	銭貨・鉄製品・金属製品・その他遺物出土状況	48
表 14	銭貨・円盤状製品・銅製品 ・その他遺物出土状況	44	表 29	瓦・埴出土状況	48
表 15	瓦・埴・漆喰出土状況	45	表 30	貝類(巻貝等)出土状況	48
			表 31	魚類出土状況	48
			表 32	種不明出土状況	48

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

かつて琉球王国の政治・文化の中心であった首里には首里城をはじめとする王府の中核施設が配置されていた。それらは1879(明治12)年の琉球処分において廃絶し、多くが撤去されたものの、いくつかの建造物は明治以降も残され、1925(大正15)年には首里城正殿や円覚寺仏殿などは国宝に指定された。しかし、1944(昭和19)年に首里城地下において日本軍の第32軍司令部壕が構築されたことにより、首里は米軍からの集中砲火を浴びることになった。それと共に国宝に指定されていた建造物を含めて首里に所在する多くの文化財は破壊され、焼失した。

戦後、琉球政府により守礼門や円覚寺、園比屋武御嶽石門、円鑑池、弁財天堂などが修復、復元整備される一方で、戦後復興による宅地開発などが進められたことにより、戦前に見られた首里の町並みの多くは失われていくこととなる。

これらが戦前から戦後にかけて大きく景観が変貌していく中、龍潭の東側一帯にあった松崎馬場も戦前の沖縄県師範学校の設置により、北側の一部が大きく改変され、戦後も琉球大学ならびに沖縄県立芸術大学の施設などが沖縄県師範学校跡とその周辺に建造されたことにより、大きく景観が変貌することとなった。

そのような状況下で1972(昭和47)年に策定された第1次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づいて、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が実施されることとなった。更に1988(昭和63)年に沖縄県土木建築部が首里城公園基本設計を策定し(沖縄県土木建築部1988)、それに基づいて沖縄県教育庁文化課並びに沖縄県立埋蔵文化財センターが1991(平成3年)年から龍潭・ハンタン山を皮切りに発掘調査を実施するに至った。現在も中城御殿跡や天界寺跡、真珠道跡、綾門大道跡など、首里城周辺での遺跡発掘調査が継続して行われている。

今回の報告に係る松崎馬場跡の調査は首里城公園基本設計に沿って、将来的な公園整備を実施するに当たっての基礎データを得る目的で行った、遺構確認調査である。当初の首里城公園基本設計では松崎馬場を歴史の道として再生を図ることや幅員4m、最大勾配15%、石粉舗装といったことが策定されていた(沖縄県土木建築部1988)。しかし、古写真や史料などからは松崎馬場の詳細までは判明できないことから、発掘調査による成果に拠るところが大きいとして、2009(平成21)年度と2011(平成23)年度に沖縄県土木建築部より予算の分任を受けて、沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって松崎馬場跡の発掘調査を実施した。

2009(平成21)年度調査については文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化課へ着手報告を行った(平成21年11月4日付 埋文第475号)。また、調査終了後には終了報告を行うとともに(平成21年12月10日付 埋文第539号)、発見された埋蔵文化財(出土品)について内訳・数量の報告を行った(平成21年12月17日付 埋文第548号)。

2011(平成23)年度調査では、同時並行で行っていた中城御殿跡の発掘調査の合間を見て隨時行つた。調査開始直後には文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化課へ着手報告を行つた(平成23年11月9日付 埋文第449号)。また、調査終了後には終了報告を行うとともに(平成24年1月23日付 埋文第547-2号)、発見された埋蔵文化財(出土品)について内訳・数量の報告を行つた(平成24年1月23日付 埋文第548-2号)。

## 第2節 調査体制

本報告書における発掘調査業務は、2009(平成21)年度及び2011(平成23)年度に実施し、調査報告書に係る資料整理業務は、2016(平成28)年度に実施した。その体制は次の通りである(職名は当時のもの)。

### 2009(平成21)年度 発掘調査

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 金武正八郎

事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 大城慧  
記念物班 班長 島袋洋、主任 澄戸哲也

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 玉榮直  
総務班 班長 嘉手苅徹、主査 本永恵、  
調査班 班長 金城亀信、主任 山本正昭

発掘調査作業 沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査班 主任 山本正昭  
文化財調査嘱託員 大堀皓平  
発掘調査作業員 舟我フジ子、佐渡山正子、砂辺理恵、玉城初美、  
中塚末子、中村フサ子、宮國恵子

### 2011(平成23)年度 発掘調査

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 大城浩

事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 長堂嘉一郎、副参事 島袋洋  
記念物班 班長 盛本煦、主任専門員 長嶺均

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 大城慧  
総務班 班長 萩堂治邦、主査 西島康二、主事(臨任)玉城飛鳥、  
砂川めぐみ  
調査班 班長 金城亀信、主任専門員 仲座久宜、主任 羽方誠

発掘調査作業 沖縄県立埋蔵文化財センター  
調査班 主任 羽方誠  
文化財調査嘱託員 宮城明恵、宮里知恵  
発掘調査作業員 安里勝則、川上益子、佐渡山正子、砂辺理恵、玉城初美、  
玉寄博紀、中塚末子、中村フサ子、西島本成子、福地佐枝子、  
宮國恵子、與儀清、吉田正志

発掘調査指導・助言

金城達(八重瀬町教育委員会)  
久貝弥嗣(宮古島市教育委員会)

2016(平成28)年度 資料整理

事業主体 沖縄県教育委員会  
教育長 平敷昭人

事業所管 沖縄県教育庁文化財課  
課長 萩尾俊章  
記念物班 班長 上地博、指導主事 神村智子

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 金城亀信  
副参事 濱口寿夫  
総務班 班長 比嘉智博、主査 新里靖  
調査班 班長 仲座久宣、主任専門員 山本正昭

資料整理作業 資料整理員 酒井若菜、島千香子、下地麻利恵、渡邊那津季、當真香、  
根岸敦子、比嘉美智子、渡邊愛依

資料整理指導・助言

瓦:石井龍太(城西大学経営学部助教)  
金属製品:久保智康(元京都国立博物館工芸室長)  
沖縄産陶器:倉成多郎(那覇市立壺屋焼物博物館)  
錢貨:桜木晋一(下関市立大学経済学部教授)

その他協力者

山田浩世(沖縄国際大学総合文化学部非常勤講師)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

松崎馬場跡が所在する県都である沖縄本島南部の那覇市の総面積は38.74km<sup>2</sup>で那覇市の総人口は2016(平成28)年11月段階では324,113人で世帯数は149,149世帯と沖縄県内でもっと大きい都市と言える。松崎馬場跡は那覇市にある首里台地(標高約100~135m)上に位置しており、地番は沖縄県那覇市首里当蔵町1-4、沖縄県立芸術大学の当蔵キャンパス内、北緯26°13'08"東経127°43'05"、標高97~98mに位置している(図3)。

当該台地の基板を構成するのは地質時代の第四紀更新世(180-160万年前から1万年前)に区分される琉球石灰岩であり、その下層には鮮新世(500万年前~160万年前)から中新世(2,300万年前~500万年前)に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、浸透した雨水は不透水層である島尻層のクチャ(泥岩・砂岩)の上面まで至り、両層の境を伝って泉として湧き出す。首里周辺にある井泉や桶川はこのような不透水層から伝って湧き出した横井戸が大半を占めている。首里城の北に広がる龍潭は周辺の不透水層から流れ出た雨水が溜まった池であり、松崎馬場周辺に溜まった雨水も南隣に位置する龍潭へ流れ込むような立地となっている。

龍潭の水面と松崎馬場跡は比高差が約4mもあり、急な落ち込みを見せる。反対に、北隣は1m前後の段差を有しており、その上面には琉球王国における官僚養成機関であった国学・孔子廟が所在していた。更にその北側においては沖縄県立博物館跡地まで平坦面が続いている。これらのことから沖縄県立芸術大学が所在する平坦地と首里城が立地する丘陵を隔てる鞍部の北側縁に松崎馬場跡は占地していると言える。

### 第2節 歴史的環境

松崎馬場の成立時期について、その詳細を記した文献史料は管見の限り見当たらない。しかし、龍潭の東岸に首里城久慶門から沖縄本島西海岸沿いで沖縄本島北部まで至る宿道が通っていたことから、松崎馬場跡の場所は宿道が設置されていた17世紀には、ある程度の整備が行われたことが窺える。また、1700年頃に成立した首里古地図に龍潭の東岸に松林が描かれることから(図6)、この時期にはすでに松崎馬場の原形は成立していたと考えることができる。

松崎馬場が本格的に整備される契機となったのは1801年、現在の沖縄県立芸術大学の場所に首里王府の最高教育機関である国学が移設されたことが挙げられる。国学の設置に伴い、その周辺の景観整備も行われていく中で首里三平等と泊村の士族や庶民により、松崎前から国学までの道に嘉木が植栽され、白砂を敷いたことが『球陽』尚温王七年条に見ることができる(久手堅2000)。また、1866年に来琉した冊封使を歓待した諸行事の会場の設営状況を図示した『冠船之時御座構之図』に所取されている「重陽宴松崎之図」にはこの時期における松崎馬場の様子が詳細に描かれている(図4)。そこには龍潭東側の縁に松を主体とした樹木が整然と並んでいる様子が描かれていることから、景観上の美観を意識した植栽がなされていたことが見て取れる。また、この絵図には描かれていないが国頭方面へ続く西海岸沿いの宿道が首里城から円鑑池を経由して松崎馬場内を通っていた。

この「重陽宴松崎之図」では冊封使を歓待するために龍潭で爬龍船競漕を行った様子を描いており、松崎馬場には冊封使並びにその一行が観覧するため、4間×5間の観覧席が設けられていたことがこの資料から読み取ることができる。他に2間×3間の布屋が2棟、茶屋、雪隠所といった施設も見ることができる(図5)。1886(明治19)年1月に沖縄県師範学校が国学跡に新築移転すると、隣接する松崎馬場は木造校舎建設により、その範囲が縮小されるなど、大きく改変がなされることとなる(写真1)。1945(昭和20)年の沖縄戦で沖縄県師範学校校舎は徹底的に破壊されたことにより、学校も廃止されるに至った。戦後直後の1945(昭和20)年には城北小学校敷地として利用され、



図1 沖縄本島の位置

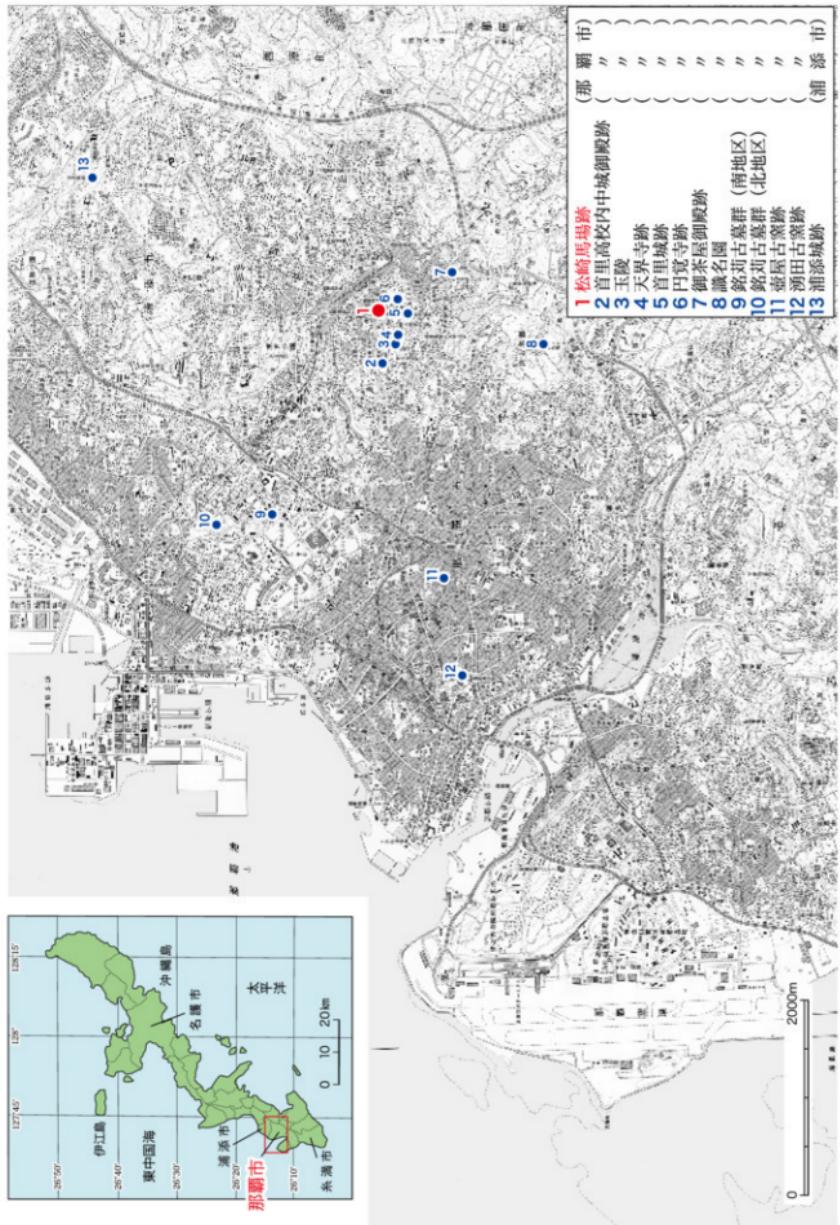


図2 松崎馬場跡の位置及び周辺の遺跡



図3 松崎馬場跡位置図

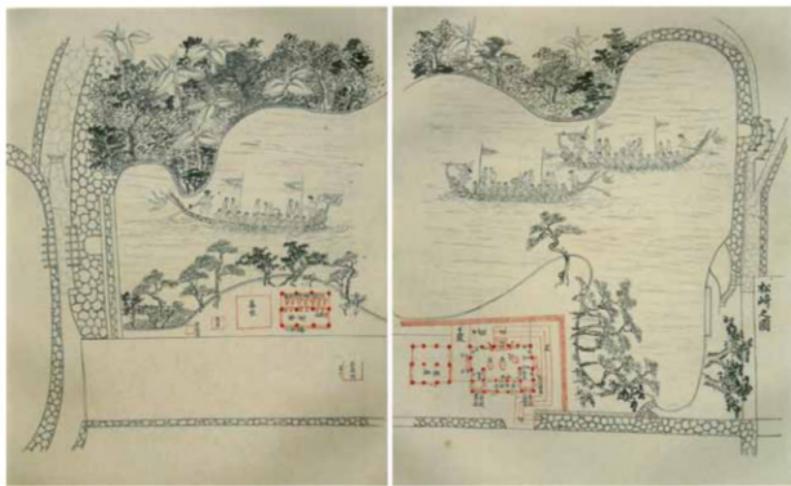


図4 『御冠船御座講之図』重陽宴松崎之図

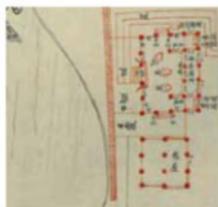


図5 「重陽宴松崎之図」に見られる松崎馬場の施設



図6 首里古地図に描かれる松崎馬場

その5年後の1950(昭和25)年に琉球政府によって琉球大学が首里城跡に設立され、国学跡並びに松崎馬場跡にも大学男子寮が設置された。この男子寮はRCによる鉄筋コンクリート造りであり、それらを建設するために周辺は広く造成が行われた。よって戦前までの様相とは更に一変することとなつた。

加えて琉球大学が1984(昭和59)年に西原町へ全面移転が完了した後、松崎馬場跡は1986(昭和61)年に設置された沖縄県立芸術大学当蔵キャンパスの一部として取り込まれ、図書館などの施設が建てられた。

このように近代以降は主に学校用地として松崎馬場跡は使用されることとなり、敷地内に学校施設が建てられるなど、大きくその様相が変わった。明治、大正期までは松崎馬場の縁に松の大木が植えられているのが古写真から伺うことができるが(写真1、2)、戦後になると、松の木は全く見られない(写真3、4)。太平洋戦争時に首里城周辺の松は壕構築の坑木として伐採されたという聞き取りがあることから(久手堅2000)、松崎馬場の松も壕構築の坑木用材として伐採されたと考えることができる。

また、北隣の国学・孔子廟跡は沖縄県教育委員会により1989(平成元)年に発掘調査された。この調査では国学・孔子廟と松崎馬場を画していた石牆と石溝が約56mにわたって検出されている。あわせて、この調査の際に松崎馬場跡も発掘されているが、関係する遺構などはとくに検出されていない(上原、島袋1991)。なお、1993(平成5)年には石牆と石溝は県指定史跡となり、現地保存されている。

近年においては2016(平成28)年3月、大雨により沖縄県師範学校設置以降に修復した国学・孔子廟跡石牆の積み直し部分が松崎馬場側に大きく崩落した。



写真1 明治期の松崎馬場跡と龍淵橋



写真2 戦前の松崎馬場跡



写真3 戦後の龍潭護岸工事状況  
(上部が松崎馬場跡)



写真4 1960年代の松崎馬場跡遠景  
(左が松崎馬場跡)



写真5 現在の松崎馬場跡遠景（北から）



写真6 現在の松崎馬場跡遠景（南西から）

### 第3章 調査経過

#### 第1節 発掘調査

2009(平成21)年度

当該年度の発掘調査は発掘調査面積約50m<sup>2</sup>を11月4日から12月4日までの14日間、実施した。調査の主な目的は県営首里城公園整備計画の中で将来的な松崎馬場跡の復元整備が盛り込まれていることから、その基礎データを得ることであり、主に近代以降における改変状況を把握するための確認トレンチを設定した。

11月1日から調査区内の草刈り作業に入り、11月10日に調査区設定を実施した。調査区は松崎馬場跡を縦断するように東西にL字状のトレンチを3ヶ所(A,B,Cトレンチ)と龍潭側に向て南北方向のトレンチ1ヶ所(Nトレンチ)の計4ヶ所を設定した。沖縄県立芸術大学の敷地内は関連施設が密集しており重機の搬入路が確保できなかったことから、表土層の掘削作業から埋め戻しに至るまで人力で行った。遺物包含層並びに遺構の検出作業を行っている過程で、Nトレンチからかつて国頭方面まで続く幹線道の宿道に伴うと思われる遺構ならびに土層堆積を検出したことから、1989(平成元)年に調査した際に同様の遺構を確認している箇所の再発掘を行った。その結果、松崎馬場跡の南側縁に沿って道跡が続いていることが確認されたため、これらの遺構及び土層堆積の写真撮影を行い、図化記録を行った。12月4日にはトレンチをブルーシートで覆った後、土で埋め戻した。



写真7 伐開作業状況



写真8 伐開後状況



写真9 実測作業状況



写真10 埋め戻し後状況

2011(平成23)年度の発掘調査は、2009(平成21)年度で確認された宿道が整備対象に加えられたことから、その現状を確認するために実施した。2009(平成21)年度で確認された宿道に伴う遺構の西側延長部分とその道幅を確認することを目的に龍潭側の斜面部にかけて2本のトレーナーを、道跡を横断するように南北方向に設定した。発掘調査は、同時並行で行っていた中城御殿跡の発掘調査の合間を見て、11月7・8日、12月7・8・10・13・28日の合計7日間行った。

まず、トレーナーを設定するための測量と、不発弾の有無を確認するための磁気探査を行った。次に清掃や除草などの環境整備を行い、人力による掘り下げを開始した。遺構を検出した段階で、検出状況の撮影を行い、平面図を作成した。またトレーナーの壁面について土層図を作成した。その後トレーナーをブルーシートで覆い、土嚢で遺構及び遺構面を保護した後、土で埋め戻した。



写真11 調査区伐開前状況



写真12 表土層掘削作業状況

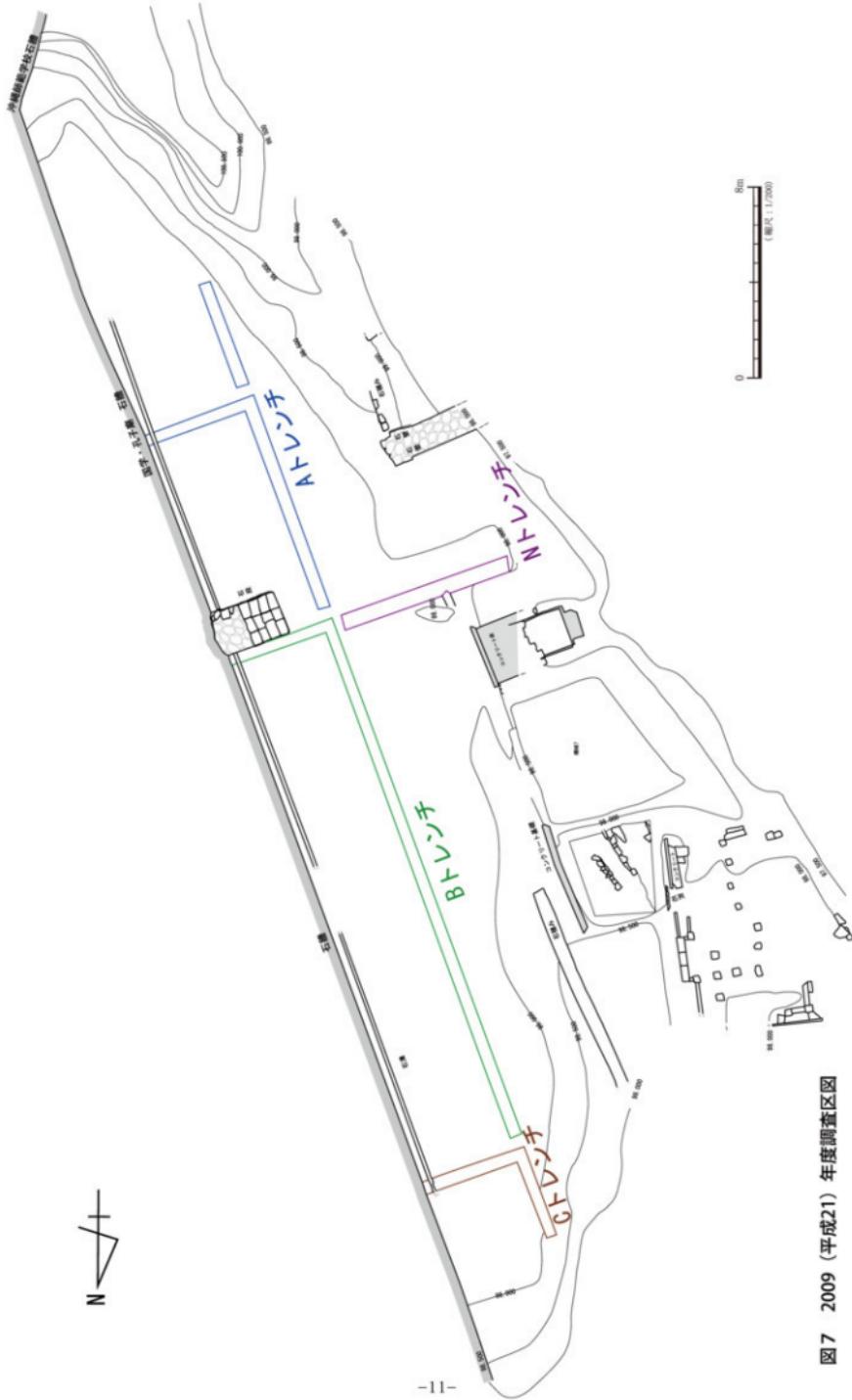


図7 2009(平成21)年度調査区図



写真 13 遺構検出作業



写真 14 埋め戻し後状況

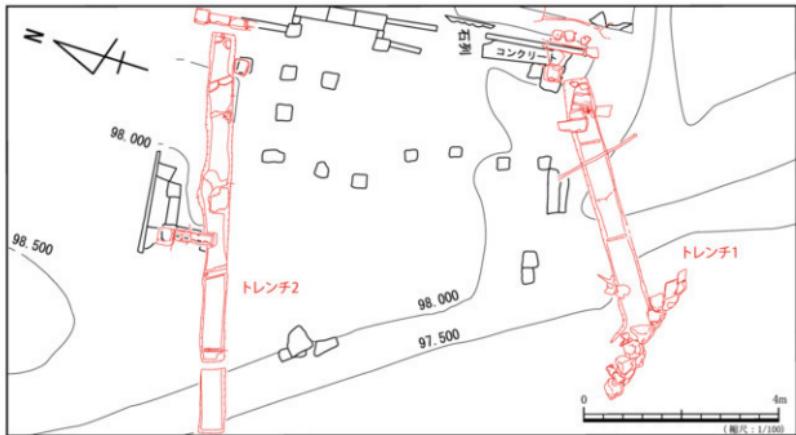


図8 2011(平成23)年度調査区図

## 第2節 資料整理

2016(平成28)年度

出土遺物の洗浄作業は2009(平成21)、2011(平成23)年度の調査の際に雨天により中断した際に実施し、何れも年度内に完了していたため、2016(平成28)年度からの資料整理作業は遺物のナンバーリング作業から実施した。また、同時並行で図面での確認も行い層序の整合や遺構と遺物の関係性などの整理を行った。その後は遺物の分類、接合、図化、報告対象遺物の抜き出し、実測図の作成、トレイス、写真撮影を順次、行った。あわせて金属製品の所見は元京都国立博物館の久保智康氏、沖縄産陶器の所見は那覇市立壺屋焼物博物館の倉成多郎氏から賜った。

トレイス作業終了後はレイアウト作業、原稿執筆そして編集作業を行ったのと同時に、遺物を再収納した。そして指名競争入札により落札した印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行する手順を取った。



写真15 2009(平成21)年度調査区全景(東から)



図9 松崎馬場跡発掘調査区図



写真16 1989(平成元)年度調査区再検出(北から)

## 第4章 層序

### 第1節 基本層序

2009,2011(平成21,23)年度調査を踏まえた基本層序は以下のようにまとめられる。まず、基本層序について触れ、その後に各トレンチの層序について触れていくことにする。また、各トレンチの対応表は表1にまとめた。

#### I層

近代以降に堆積した表土層で、現代のガラス片や金属片等を含む腐葉土。沖縄産陶器なども当該層から出土している。

#### II層

5~10mm程度の石灰岩礫で構成される小礫層。全体的に薄く、厚い部分でも5cm程度の堆積である。主に調査区の北側一帯に見られ、南側一帯には及ばない。出土遺物は近代磁器が見られることから近代の整地層と考えられる。

#### III層

当該層は粘土層と粘質微砂層とに分けられる。前者はII層同様に調査区の北側一帯に見られ、出土遺物も近代磁器が見られることから、II層に伴う近代の造成層と考えられる。後者は南側一帯に見られ、VII層全面を被覆する。漆喰片が多く混入しており、近世の遺物が多く見られる。

#### IV層

石灰岩の小礫で構成され、締りは弱い。近世の整地面であると考えられる。出土遺物は認められない。

#### V層

当該層は堆積層の中で最も厚みを有する。2層に細分され、上層はクチャブロックが多く混入する粘質土で、下層は1cm前後のサンゴ礫が密に混入する締まりのある粘質土である。IV層に伴う近世の造成層と考えられる。出土遺物は明朝系瓦が見られる。

#### VI層

1cm前後のサンゴ礫が大量に混入する締まりのある粉砂層である。当該層はNトレンチの北側やトレンチ1、2で確認されており、約1mの幅で松崎馬場の縁に沿って続いていることから、宿道の路面に相当すると思われる。

#### VII層

砂礫やクチャブロックが混入する締まりのある粘質土層。調査区の広い範囲で見られることから、松崎馬場の場所が本格的に利用され始めた時期の造成層であると思われる。一部、VI層の基盤層となる。出土遺物はグスク土器や錢貨が見られる。

#### VIII層

遺物を包含しない泥岩層でNトレンチ中間から北側で確認された。

表1 2009, 2011(平成21,23)年度層序対応表

B-Xトレンチ 色調	2009(平成21) 年度 特徴	基本層序	2011(平成23) 年度			
			トレント1 色調	特徴	トレント2 色調	特徴
黄褐色 (2. SY13/3)	粘性高く板状でしまりが悪い。底面 土。	I層 現代の表土層	1層 黄褐色 (10YR2/3)	表土層である。 底面でしまりが悪い。	1層 黄褐色 (10YR2/3)	表土層である。底面でしまり が悪い。
明黄色 (10YR6/8)	コーカル層、小礫の散在した層。	II層 近代の整地層				
オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	粘土層、粘性高く粒子は細かく、や やかましく。	III層 近代の造成層			2層 オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	底面でしまりが良い。チャバ ク層(10YR4/2層と10YR6/4層の 間)がある。土壌主 成分は砂質である。10cm以上 の土層の表面土層が多く 見られる。
オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	粘性ややあり、粒子は細かくやや かましく、底面には小礫が混入。 所々に塊状が入る。				3層 オーラーブ褐色 (2. SY13/6)	チャバク層(10YR4/2層とオーラー ブ褐色の間に含む)、しまりが良 い。塊状は見られない。
明黄色 (10YR6/8)	コーカル層、小礫の散在した層。1-2 cmに対応。100年の歴史から。	IV層 近世の整地層				
オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	表面はブロッケ状で、表面はより 粗面でかさつきがある。3cm大の チャバク層の下部を除く多量に 見られる。チャバク層は底面と土層 に見られる。	V層 近世の造成層	2層 オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	底面でしまりが 良い。土壌主成分は砂質の層 であるが砂礫が多量に含 まれる。10cmの層、底面が最も 厚い。		
黄褐色 (2. SY13/3)	底面で層状構造、粒径が大きめで しまりが悪い。1cmの大粒のサンゴ礁が多量に混 ざる。		3層 明黄色 (2. SY17/6)	底面が風化した印象。1 cm以上の礫を含む。和 風瓦の層(2. SY14/6)。 しまりは良い。		
暗灰褐色 (2. SY16/6)	石灰岩層、細かく砕かれた塊状の 灰岩の塊を含めて弱くしまった層。 表面は粗面で底面は土層と思 われる。	VI層 国境方面海道造成層				
明黄色 (2. SY17/6)						
褐色 (10YR4/4)	底面は層状構造、細かく砕かれた塊状の 灰岩の塊を含めて弱くしまった層。 表面は粗面で底面は土層と思 われる。	VII層 グスク時代の造成層	4層 オーラーブ褐色 (2. SY14/6)	底面でしまりが良い。ト レンチ2南側の2層と類似 する。		
	底面は層状構造、細かく砕かれた塊状の 灰岩の塊を含めて弱くしまった層。 表面は粗面で底面は土層と思 われる。					
10層	黄褐色 (2. SY13/3)					
11層	オーラーブ褐色 (2. SY14/6)					
12層	褐色 (10YR4/4)					

## 第2節 2009(平成21)年度調査

### 1.Bトレンチ

当該トレントでは全部で6層確認され、何れも水平に堆積しているのが認められた。表土層以下では、2層と5層は石灰岩礫が密に混入しており、薄く水平に堆積していることから、かつての整地面であることが窺われる。Nトレントとの比較検証から、2層は近代の整地面で3層は近世の整地面であると考えられる。6, 7層は近世の造成層で当該トレントの中でも最も厚く堆積している遺物包含層である。10層はグスク時代の造成層と考えられるが、当該トレントから遺物は出土しなかつた。基盤層は泥岩層で地表面から約1m下げた地点で確認された。

### 2.Nトレント

当該トレントからは近代の整地層と思われる2層とその造成土とされる3層、そして近世の整地層と思われる5層とその造成土とされる6、8層が確認されている(写真19)。2、5層の整地層はいずれも石灰岩の小礫で構成されており、厚さは5cmと薄い。また、当該トレント北側の一部にのみ確認されている。造成土とされる5層は締まりのある粘土層で6層は5cm前後のクリヤブロックが下層を中心に大量に混入し、8層は1cm前後のサンゴ礁が大量に混入する。6, 8層ともに20~30cmと当該トレント北側において厚く堆積している(写真20)。

9層は1cm前後のサンゴ礁が大量に混入する固く締まった粉砂層でトレント1の3層と対応する。厚さは約10cmで水平に堆積しているが、南側においてやや傾斜を有している。また、当該トレントの南側でのみ検出されている。この9層が途切れる位置に加工された石灰岩が確認され、その直下にのみ混入の粘質土である7層が見られる。10層からはグスク土器が、12層からは中国鏡が出土していることからグスク時代の遺物包含層である。また、10層は北側一帯、11,12層は当該トレントの南側一帯で見られることから、前者は9層に対応した造成土であると思われる。更に11,12層の

直下にのみ拳大の石灰岩礫を密に敷いていることが確認された。この礫敷きは人力では掘削できないほど固く締まっており、上面には細かい凹凸が見られた。9層が宿道を構成している層とすると南側の加工された石灰岩は道の縁石で、11, 12層は宿道の造成土として位置づけることができる。そして、その直下に見られる礫敷きは道の沈下等を防ぐための丁寧な基礎事業であると判断される。

当該トレンチの基盤層は泥岩層であり、北半部で検出した。また、南側の龍潭へ下がる斜面部の堆積土は戦後の攪乱層であり、基盤層近くまで及んでいる。

### 3. 調査対象区域における堆積層の広がり

A～Cトレンチでは表土層を除去した後、サンゴ礫が密に混入する2層を全てのトレンチで確認することができた。ただしその広がりにはトレンチ毎に粗密が見られた(図10)。とくに2層が厚く堆積していたのは、松崎馬場跡の北側に設定したCトレンチであった。反対に松崎馬場跡の南側に設定したAトレンチIと同トレンチの北側に設定したBトレンチでは部分的に2層が見られ、一部確認できない場所も見られた(巻頭写真3、写真17)。また、前述したように松崎馬場の南側(龍潭側)では2層は確認されなかった。この粗密の差はどのような要因によるものかは分からぬが、沖縄師範学校が設置された1886(明治19)年以降において松崎馬場が改変された後の使用実態を示す痕跡と考えることができる。



写真17 Bトレンチ表土層除去後



写真18 Bトレンチ堆積状況（東から）

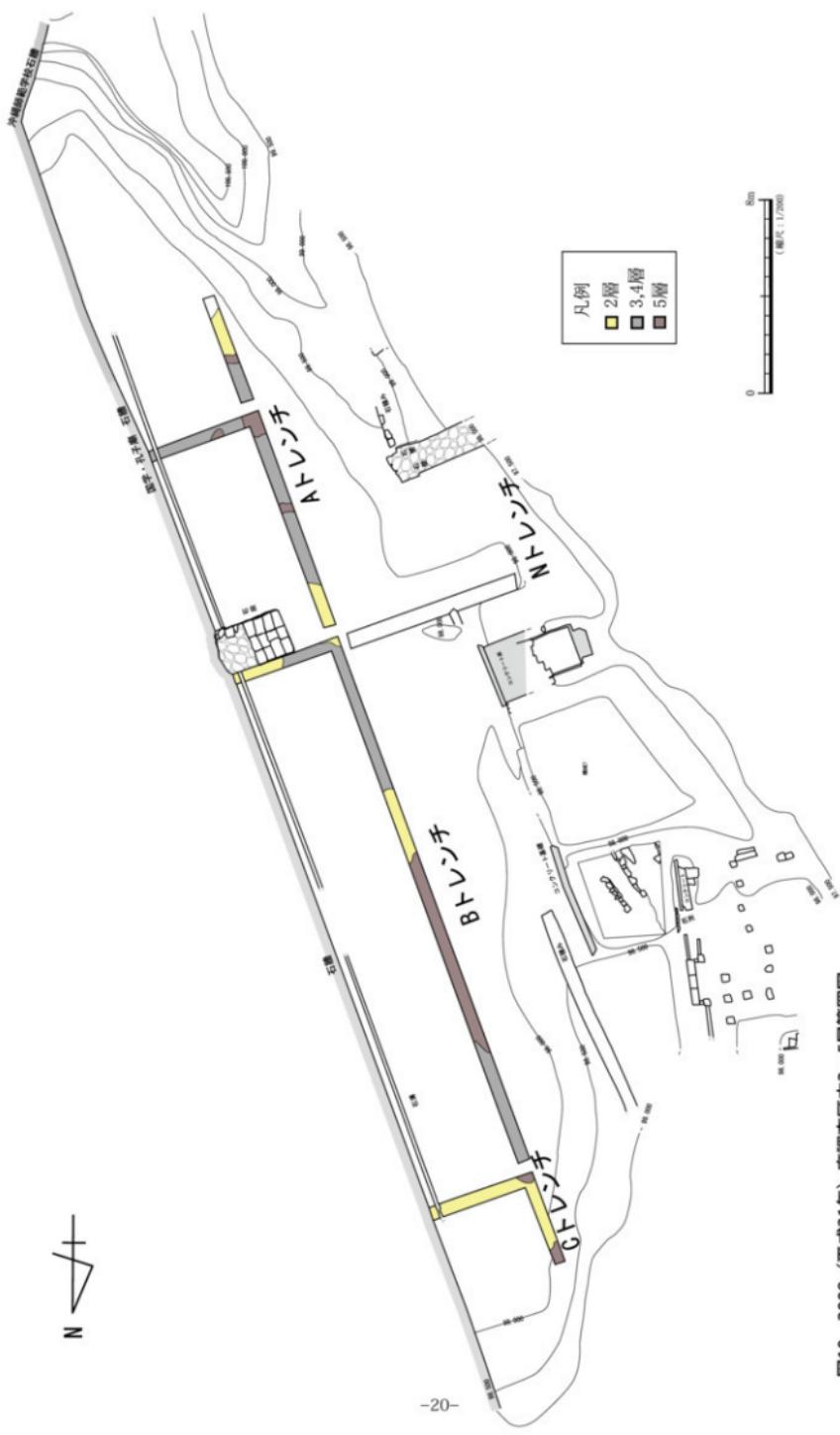


図10 2009（平成21年）度調査区内2～5層範囲図



写真 19 N トレンチ西壁北側



写真 20 N トレンチ西壁東側

### 第3節 2011(平成23)年度調査

#### 1 トレンチ 1

1層は表土層である。2層は近現代の造成土と考えられ、3層は粉砂層で宿道を構成している層の可能性がある。4層は宿道を設置するための造成土であると思われ、Nトレンチの11層に対応すると思われる。

#### 2 トレンチ 2

1層は表土層である。2、3層は、宿道を被覆する近現代の造成層である。トレンチ東側の最下層において、宿道を構成する緑石と粉砂を検出した。

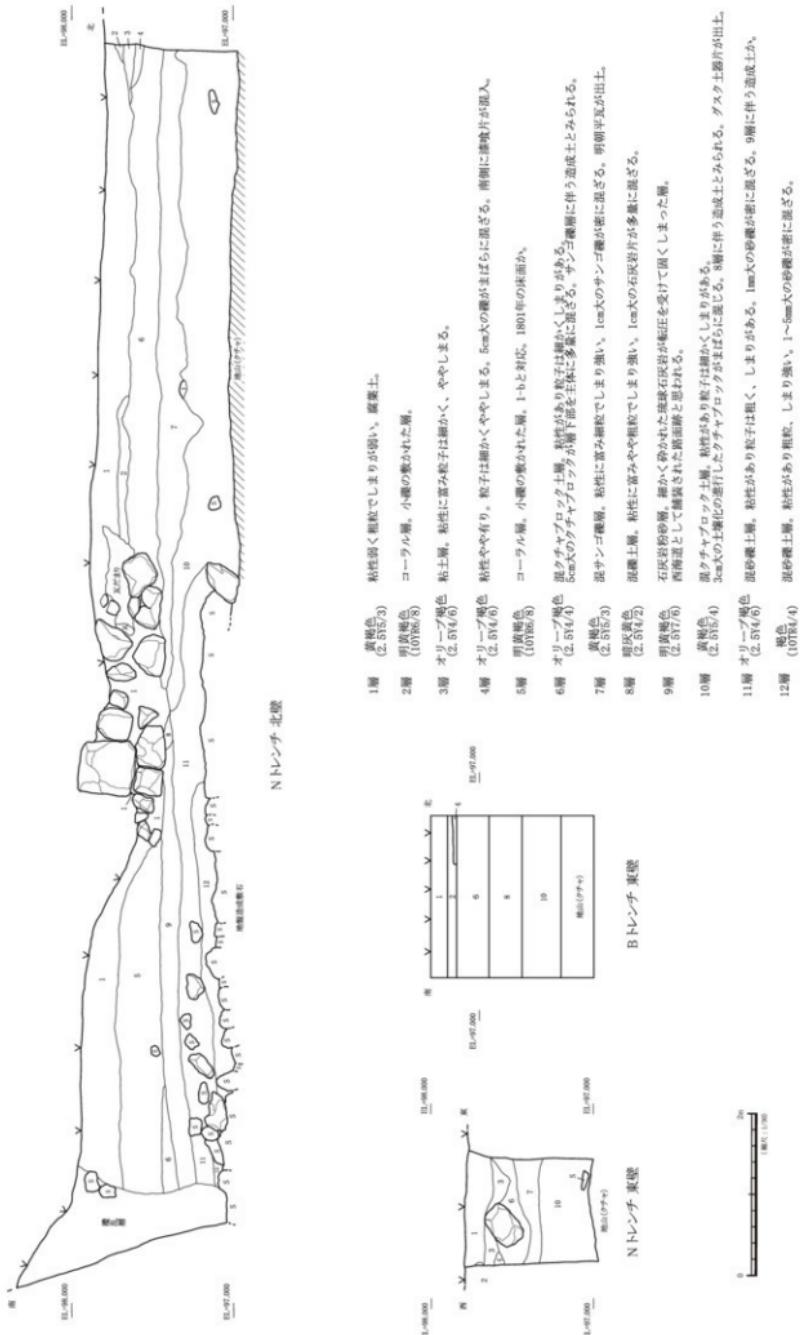


図11 2009(平成21)年度土層断面図

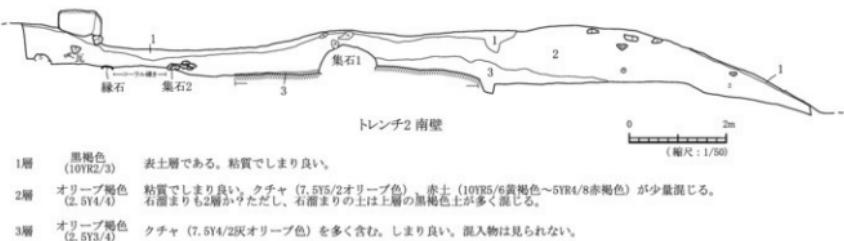


図 12 2011(平成23)年度土層断面図



写真 21 トレンチ1 西壁



写真 22 トレンチ 1 東壁



写真 23 トレンチ 2 東壁



写真 24 トレンチ 2 東壁

## 第5章 遺構

### 第1節 2009(平成21)年度

#### 1 碓敷き

前章でも触れたようにNトレンチの南側、11, 12層の直下に礫を密に敷いているのが確認されている。拳大の石灰岩を込め入れており、人力で掘削ができないほど固く締められている。幅は約1.5mで松崎馬場跡の南側、龍潭へ下る斜面地と接する縁辺部にのみ見ることができる。

その上層からは宿道の路面となる9層が見られることから、礫を混入して強く固めているのは道の沈下や崩落を防ぐための基礎事業であると考えられる。この礫敷き直上、11層の下層から中国鉄が1点出土している。



写真25 磕敷き検出状況全景（南から）



写真26 磕敷き近景

### 第2節 2011(平成23)年度

#### 1 道跡

トレンチ2において、宿道の縁石と路面に敷かれた石粉を検出した。近世以前に構築か。

#### 2 集石

トレンチ2において、拳大の石灰岩からなる集石を2基検出した。集石1は2~3cm前後の礫が混入しており、固く締められている。集積は2基ともに宿道より上面から検出されている。近代以降に構築されたと考えられる。

#### 3 石積み

トレンチ1の西端で検出した。土留めの石積みと考えられる。周囲には同様な石積みがいくつか確認できる。



写真 27 道跡全景（南から）



写真 28 道跡の縁石



写真 29 集石 1（南西から）



写真 30 集石 2



写真 31 石積み（南から）



写真 32 石積み上面

## 第6章 遺物

今回の松崎馬場跡発掘調査で出土した遺物の全てが小片であり、残存率の高い遺物を優先的に報告対象とした。

出土遺物の総点数は3408点で、うち2009(平成21)年度調査では3284点、2011(平成23)年度調査では124点の遺物が出土している。のことから松崎馬場跡発掘調査で出土した遺物のうち、2009(平成21)年度調査で得られた遺物が大半を占めていると言える。よって本章では2009(平成21)年度調査で出土した遺物を主に報告していく。2009(平成21)年度調査では瓦が1962点と最も多く出土しており、次いで沖縄産陶器の418点、中国産陶磁器の132点、陶質土器の129点となっている。また、出土遺物の大半が表土層からの出土であり、全体の90%以上となっている。なお、Nトレントから表土層以下の遺物包含層からは59点、Bトレントのサブトレント内からは13点の遺物が出土している。

2011(平成23)年度調査で出土した遺物のうちトレント2の遺物包含層から出土した遺物は12点のみで、他は表土層ならびに攪乱層からの出土である。なお、出土遺物は何れも小片であったため、図化できたのは図16のサーベルのみであった。

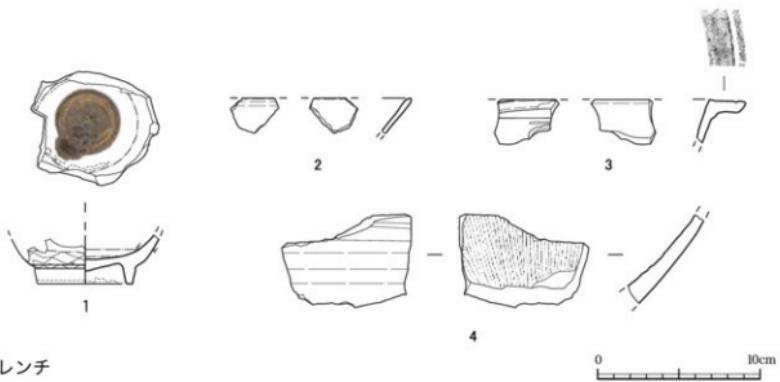
出土遺物の中で瓦が1962点と最も多く出土している。軒瓦は3点のみであり、全て丸瓦であった。隣接していた国学の建物や孔子廟の屋根に葺かれていた瓦が廃棄された際に松崎馬場周辺へ流れ込んでいた可能性が考えられる。また、近代の大和系瓦も見られることから、沖縄県師範学校に関係する施設に葺かれていた瓦である可能性も指摘される。

出土した陶磁器類は碗や皿が主体であり、火取りや壺の口縁部、すり鉢なども僅かであるが出土している。

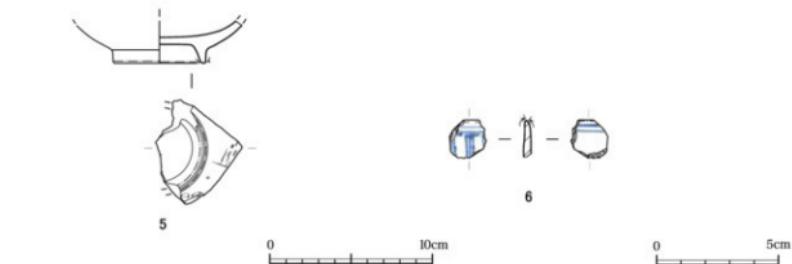
表2 出土遺物観察表(1)

図番号 写真番号	種類	器種	部位	口径・ 長さ (cm)	底径・ 幅 (cm)	器高・ 厚さ (cm)	所見	出土地
図13 写真33	沖縄産無釉陶器	碗	底部	—	—	5.9	高台はやや高く、裏付けは水平となる。内底面は凹み、脚部への立ち上がりはやや急となる。また、脚部と高台部分の接線部には隙が見られる。高台下部は僅かに削りが見られる。黒褐色の釉薬を各脚部と内面に薄く施し、内底面は輪状に施粉となる。胎土は赤で、黄色色を呈し、胎土の微粒子が僅かに混入している。	トレントB 1層
	沖縄産無釉陶器	碗	口縁部	—	—	—	口縁部は底口、口部端は丸みを帯びている。脚部へは直線状に移行する。内外表面に赤色釉が薄く施されており、かなり細かい貫入が見られる。胎土は赤で、黒褐色の微粒子が僅かに混入する。	トレントB 1層
	沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部	—	—	—	口縁部はL字状に折れ、跨部に横筋を1条施す。また、口縁下部には段が見られる。器底は赤で、口縁端部のみ黒色となる。胎土は赤で黒色を呈し、やや大きい孔が微見される。	トレントB 1層
	沖縄産無釉陶器	櫃り鉢	脚部	—	—	—	脚壁は厚く、内面には間に握り目が刻まれている。器底は内外表面に赤褐色である。胎土は赤で、色調は器色と同色である。大小の赤色粒や灰岩質の粗粒子が多く混入している。	トレントB 1層
	本土産陶器	碗	底部	—	—	5.8	高台は極くハの字形状に削く脚部、脚部下部に白色釉薬による上給付が見られることから赤褐色の可能性がある。高台の内側にはやや深く、底面の器壁は脚部に比べて薄い。内外表面共にやや墨色がかった透明白釉を施し、高台下部から裏付けにかけて露胎となる。胎土はかなり赤で白色となる。肥厚系。	トレントC 1層
	円盤状製品	—	—	—	—	—	略化した舟文を外側に施いた中國產舟形を利用了した、粗く打ちついで成形している円盤状製品である。口縁部は近くを利用来しておらず、口縁のみは全く打ちついでいない。そのため、かなり歪な円盤となる。最大径は8mmと小型である。	トレントC 1層
	中国産青磁	碗	口縁部	—	—	—	口縁部が外反し、縁面部は僅かに玉縁状となる。脚部はふくらみが見られる。内外脚共に青緑色の釉が厚く施され、全般的に粗い貫入が見られる。外底脚部には蓮瓣文の舟先とと思われる立て置きが見られるが、小片のため不明。胎土は赤で黄白色、小孔が赤に見られる。肥厚系。	トレントN 4層
	本土産陶器	碗	底部	—	—	5.8	高台はやや高く、ハの字形状に削く脚部の継ぎ、裏付けは丸味を有し、脚部は大きく膨らみを有し、内底面は水平となる。脚部に文様が見られるが破損・剥落したため、全體構成は不明。内外表面共に透明白釉を薄く施し、高台下部から裏付けにかけて露胎となる。胎土はかなり赤で白色となる。肥厚系。	トレントN 11層
	鉢	—	—	—	—	—	中國製と思われるが、2字以外に銘記が欠損しているため詳細は不明。「元」と「寶」の字のみ判読可能である。背面は無釉、厚みが2mmとなり薄い。	トレントN 11層

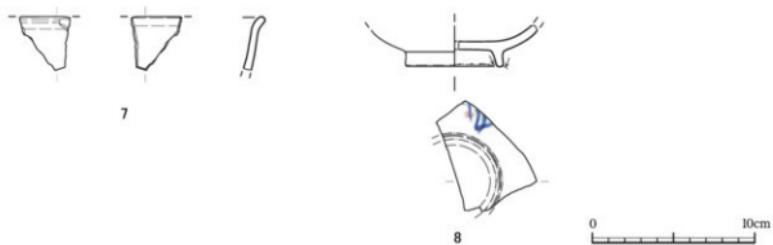
表3 出土遺物觀察表(2)



Bトレンチ



Cトレンチ



Nトレンチ

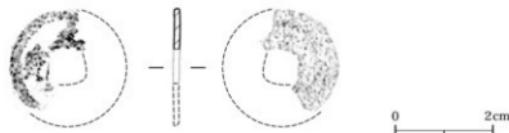


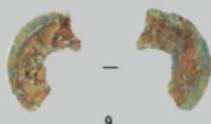
図13 B,C,Nトレンチ 出土遺物



Bトレンチ



Cトレンチ



Nトレンチ

写真33 B,C,Nトレンチ 出土遺物

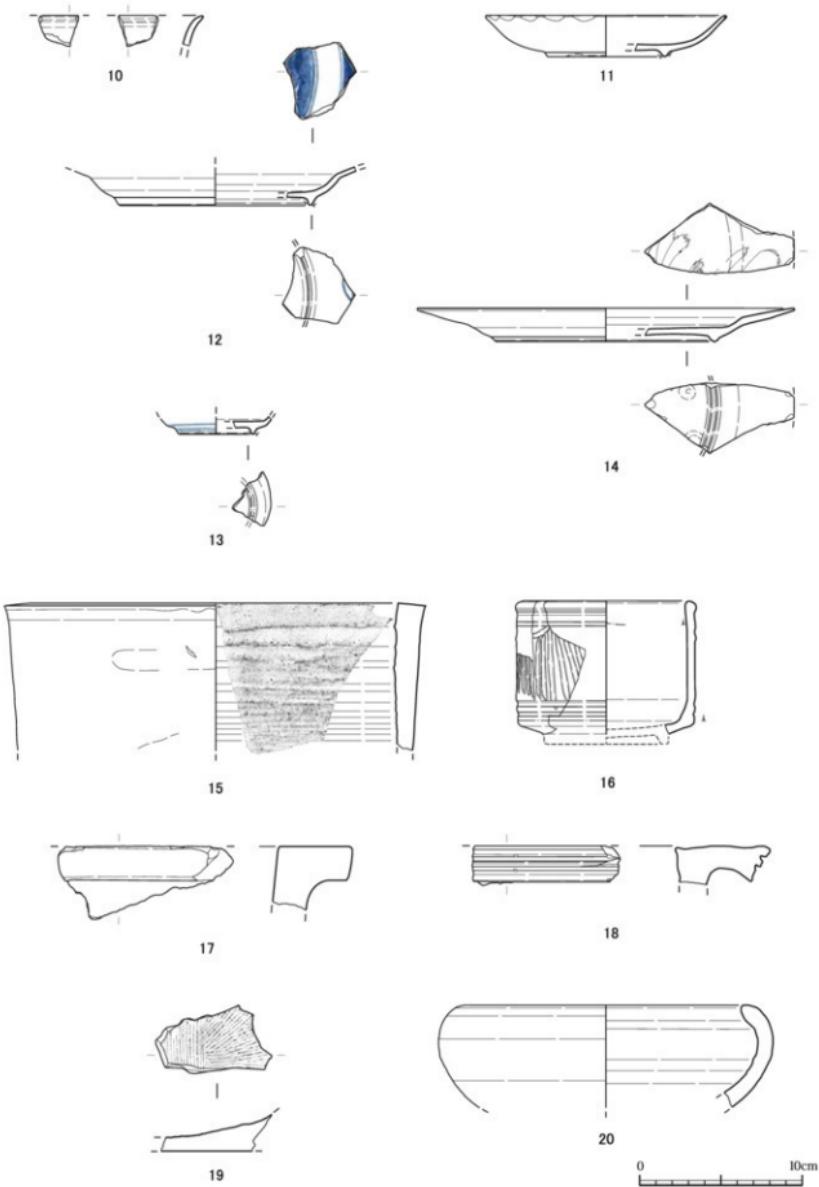


図14 表土出土遺物（1）

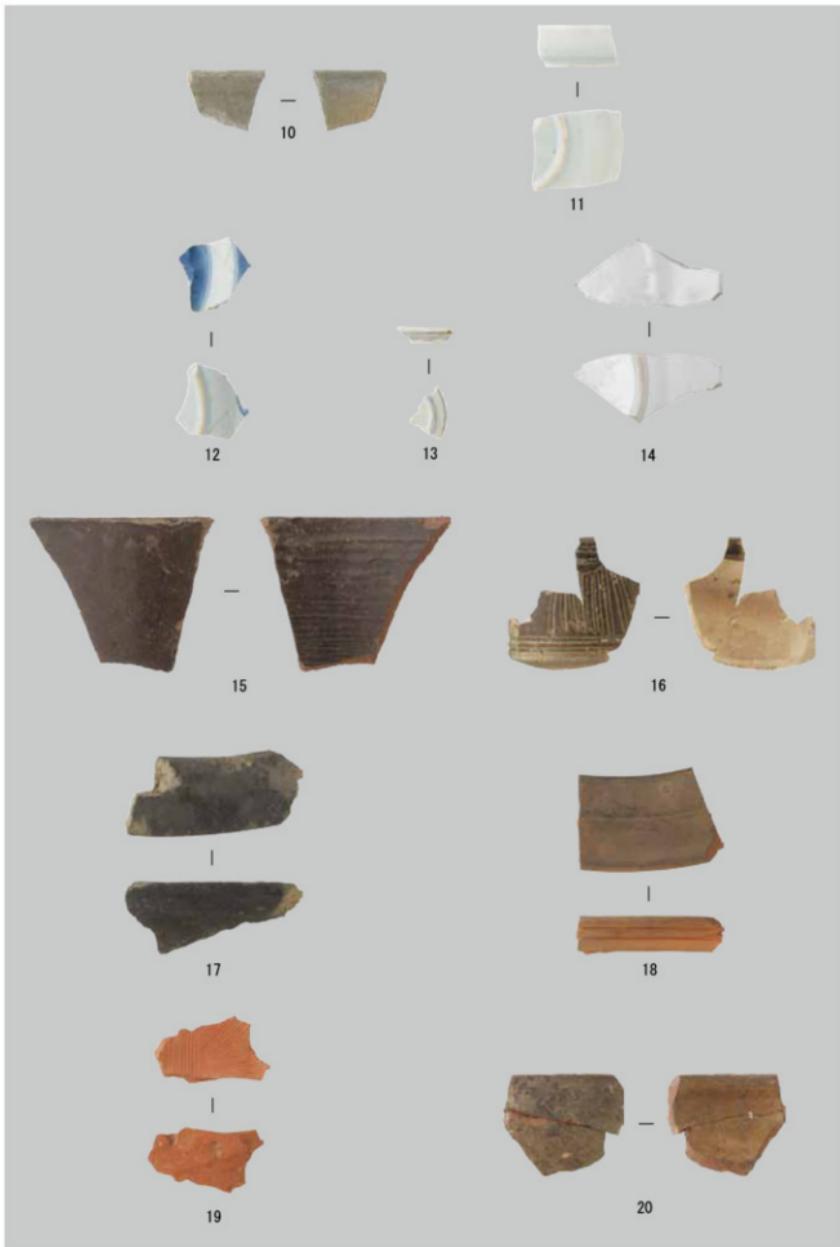


写真34 表土出土遺物（1）

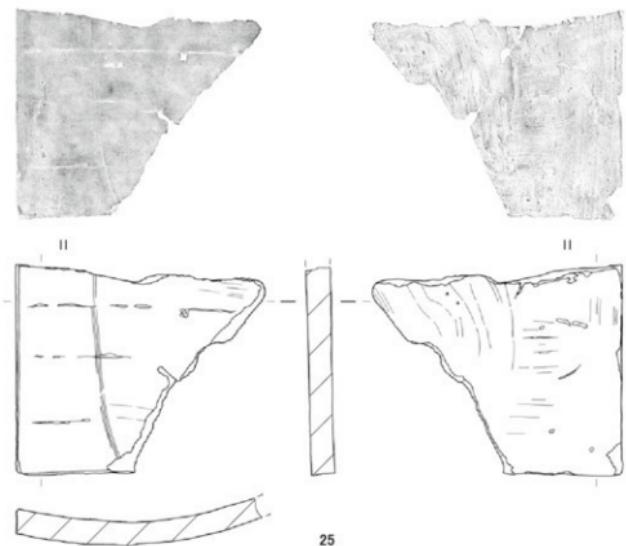
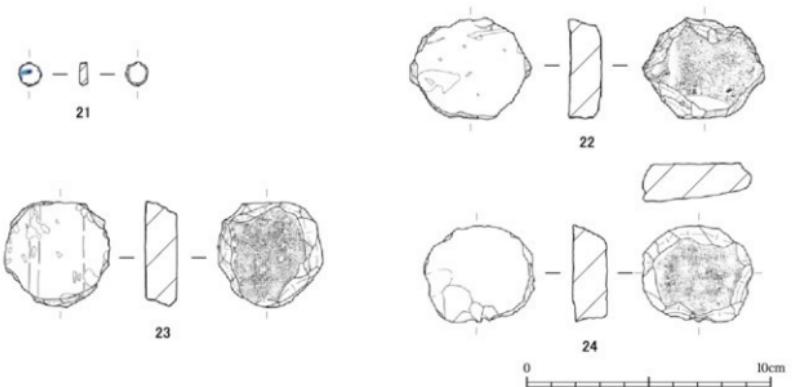


図15 表土出土遺物（2）

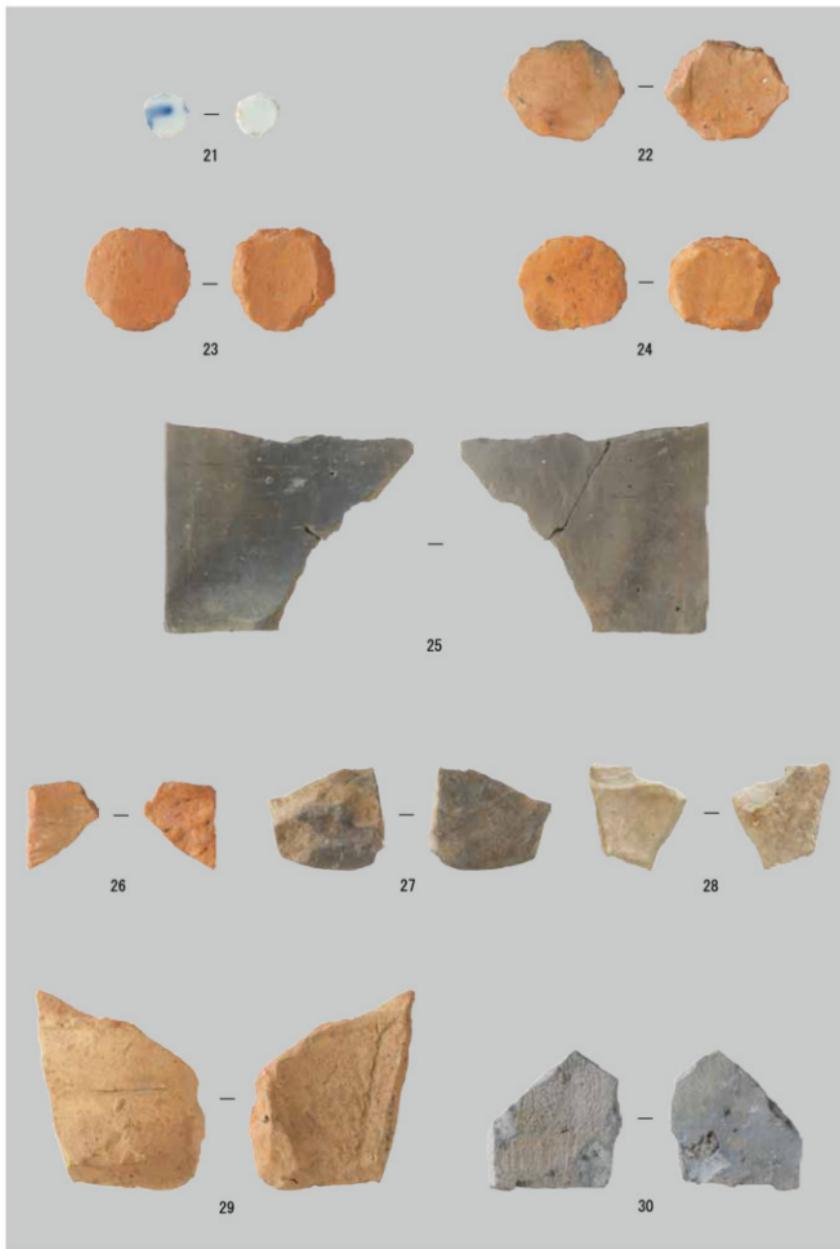
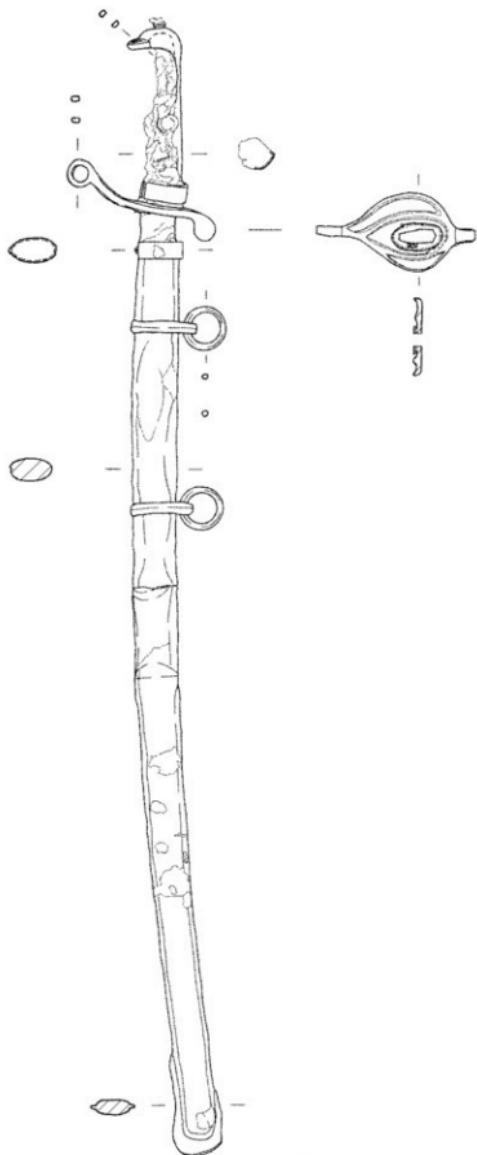


写真35 表土出土遺物（2）



31

0 10cm

図16 2011(平成23)年度調査出土遺物・サーベル



写真36 2011(平成23)年度調査出土遺物・サーベル(右上:佩銀、右下:锷)

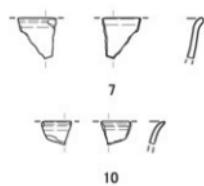


図 17 中國産青磁

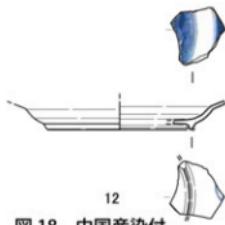


図 18 中國産染付

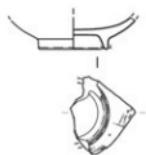


図 20 本土産白磁



図 21 本土産染付

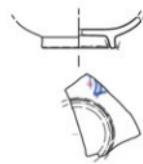


図 19 本土産白磁

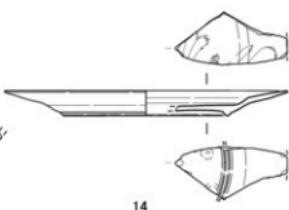


図 22 本土産色絵

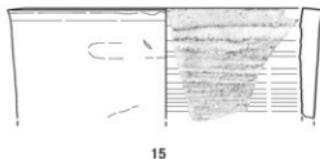


図 23 本土産陶器

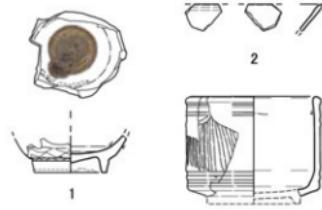


図 24 沖縄産施釉陶器

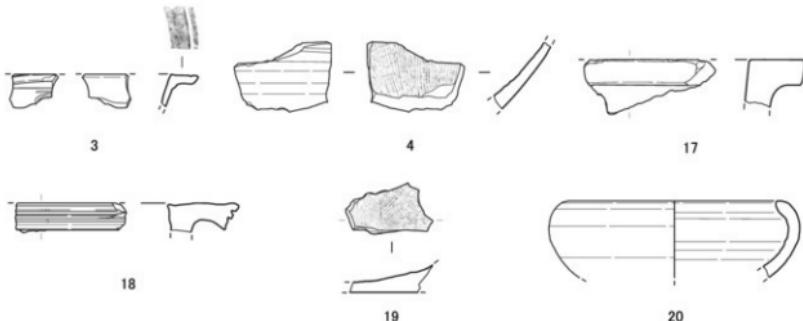


図 25 沖縄産無釉陶器

0 10cm

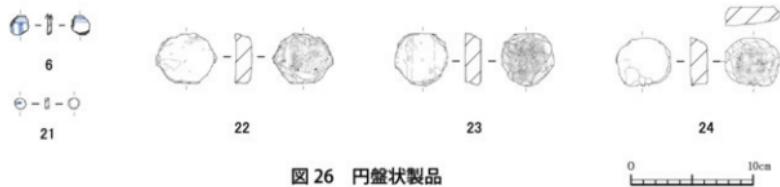
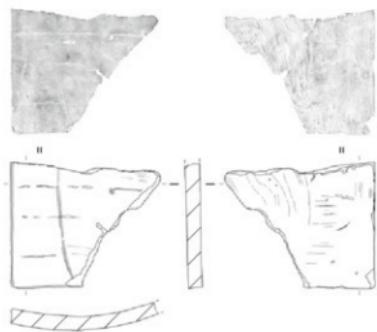


図 26 円盤状製品



図 27 銭貨



25

図 28 大和系瓦

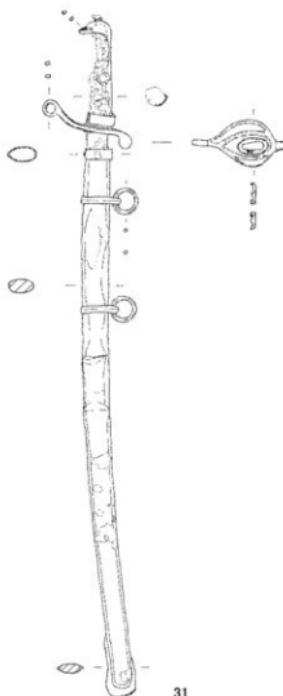


図 29 明朝系瓦



図 30 サーベル



写真37 貝類・脊椎動物遺体

- 巻貝 サザエ科 1.ヤコウガイ 2.ヤコウガイ 蓋 3.チヨウセンサザエ オニノツノガイ科 4.ウミニナカニモリ  
ソデボラ科 5.オハグロガイ 6.マガキガイ タカラガイ科 7.ハナビラダカラ イモガイ科 8.ヤセイモ  
9.イボシマイモ 10.サヤダカイモ? ヤマタニシ科 11.オキナワヤマタニシ  
二枚貝 イタヤガイ科 12.ウミギクガイモドキ ツキガイ科 13.ウラキツキガイ 14.ヒメツキガイ  
マレスマダレガイ科 15.ヌメガイ 16.アラスジケマンガイ 17.ホソスジナミガイ 18.ハマグリの一種  
魚骨 19.主鰓蓋骨 種類不明  
ニワトリ 20.大腿骨 イヌ 21.中足骨 イノシシ 22.上顎 23.踵骨

表4 2009(平成21)年度遺物出土状況

種類	出土地	A トレンチ A・ B C D N	Bトレンチ			Cトレンチ		Nトレンチ			貴大律物 基礎内		石器倒壊内 下層	表土 表保 下層	出土 土地不明	合計	重量(kg) 集計分		
			1・ 2層	3 層	4 層	サトレンチ 表土	表土	下層	苔 被 瓦 土上	上 層	擾 乱 層	表土							
中国窓 (132点)	青磁 白磁 染付			1	1		1	2		1			5 26 64	10 27 66	0.077 0.070 0.176				
	鶴輪 色絵 唐泥				1			1	4	1			16 1 5	22 1 6	0.206 0.003 0.040				
	タイ産陶器 (2点)												2	2	0.035				
	床地不明陶器 (1点)												1	1	0.009				
陶 磁 器	白磁 染付 色絵	1				1					1	1	13 6	1	1	0.028 0.094 0.112			
	本土窓 (67点)						2					6	21 2 4	31 3 7	0.311 0.320 0.061				
	磁器 陶器 鶴輪					3		1											
	沖縄窓 (418点)		2 3 1	1 1 1	1 1 3	2 1			1		1	2	270 121 1	281 137	1,808 2,763				
土器 (10点)	陶質土器 (129点)	1					2		1				3 125 2	5 129 3	0.010 0.451 0.158				
	瓦質土器 (3点)						1												
	床地不明陶器 (63点)					4	1	1					56 1	63	0.341				
	瓦質 (1点)							1											
陶質 灰 灰質 灰	円盤状製品 (13点)	1											12 2	13 43	0.001 0.206 487,600				
	石製品 (46点)					1													
	銅製品 (5点)												4 11 33	5 12 33	0.023 0.070 0.117				
	鉄製品 (12点)																		
ガラス片 (33点)	プラスチック製品 (3点)												3 2 1	3 47 136	3 49 3 141	0.006 0.054 1.232 0.002			
	炎 (49点)																		
	燒土 (141点)																		
	モルタル (1点)												1 30	1 33	1 1,962				
自然 物 材	自然石 (33点)					1		2											
	瓦 (1962点)	5 1	9 1	15 1	2 1	9 1	7 1	29 12	38 1	23 1	39 1	13 1	5 1	1768 61 2	1962 65 2	55,857 3,125 0.193			
	貝類 (86点)							2	1					43 20 16	47 20 19	0.672 0.079 0.037			
	骨傳動遺体							1	1	1									
合計		12	16	18	3	12	15	48	51	26	1	32	2	47	29	8	2932	46	
																	3	2284	477,406

表5 青磁出土状況

種類・部位	出土地	Bトレンチ			Nトレンチ			表土	合計
		1・2層	4層	下層	表土	表土	表土		
瓶	口縁部				1	1		2	
	胴部	1						2	3
	底部						1	1	
器種不明	口縁部						1	1	
	胴部		1	1			1	3	
	底部						1	1	
小杯	口縁部				1	1			
	底部			1	1				
	底部			7	7				
蓋	口縁部			2	2				
	底部			1	1				
	底部			10	10				
合計		1	1	2	1	5	10		

表6 白磁出土状況

器種・部位	出土地	Cトレンチ		表土	合計
		表土	表土		
瓶	底部		2	2	
小瓶	胴部	1	2	3	
小皿	口縁部		1	1	
杯	底部		1	1	
小杯	口縁部		7	7	
蓋	底部		2	2	
器種不明	胴部		10	10	
	合計	1	26	27	

表7 染付出土状況

器種・部位	出土地		Bトレンチ サブトレンチ	Nトレンチ 上層	表土	合計
	Bトレンチ	Nトレンチ				
瓶	口縁部			12	12	
	胴部		1	8	9	
	底部			8	8	
豆	胴部			2	2	
	底部			2	2	
	小杯					
器種不明	口縁部			4	4	
	胴部	1		28	29	
	合計	1	1	64	66	

表8 その他中国産陶磁器出土状況

器種・部位	出土地		Bトレンチ 表土	Nトレンチ 表土	Nトレンチ 鉢底直上	Nトレンチ 下層	表土	合計
	Bトレンチ	Nトレンチ						
色絵	小柄	底部						1
	復	類部						1
	器種不明	胴部			1	1	4	21
青花	器種不明	胴部					8	8
	底部	底部			1			1
	合計			1	1	1	4	22
合計								

表9 その他陶磁器出土状況

器種・部位	出土地		Cトレンチ 表土	Nトレンチ		表探	表土	合計
	Cトレンチ 表土	Nトレンチ 上層		Nトレンチ 下層	表探			
タイ波高輪 (2点)	蓋	胴部				1	1	
	合子皿	胴部				1	1	
鹿地不明焼 (1点)	器種不明	胴部				1	1	
虎地不明	瓶	胴部	1			1		2
陶磁器(53点)	器種不明	胴部	3	1	1		56	61

表10 本土産陶磁器出土状況

器種・部位	出土地		Bトレンチ 表土	Cトレンチ 表土	Nトレンチ		大堀物 基礎内	石壁側 構内	表土	表探	合計
	Bトレンチ サブトレンチ	Nトレンチ 表土			Nトレンチ 下層	複瓦層					
白磁(1点)	蓋	口縁～底部			1						1
染付	瓶	口縁部				1			3		4
		胴部		1							1
		底部						1			1
	豆	底部									
	小鉢	底部						1			1
	器種不明	口縁部							1		1
		胴部							7		7
合計			0	1	0	0	1	0	13	0	16
色絵	豆	口縁部						1			1
		胴部			1						1
		底部			1				2		3
	洋食器	口縁～底部			1			1			1
	器種不明	胴部						1	2		3
合計			0	0	2	0	0	0	6	0	9
磁器(近代)	瓶	口縁～底部						1			1
		口縁部			1		4		7		12
		胴部					1		7	1	9
		底部	1								1
	器種不明	口縁部			2		1		5		8
合計			0	1	3	0	0	6	0	21	32
陶器	瓶	胴部				1					1
	陶管	端部							2		2
	合計		0	0	0	1	0	0	0	2	3
馬軸	蓋	胴部						2			2
		底部						1			1
	器種不明	口縁部	2						1		3
	合計		2	1	0	0	0	0	4	0	7

表11 沖縄産施釉陶器出土状況

器種・部位	出土地	Bトレンチ				Cトレンチ		Nトレンチ		表土	合計
		A・B・C Nトレンチ	表土	1・2層	3層	サブ トレンチ	表土	上層	表土		
瓶	口縁部	1	1			1			16	17	
	胴部	1							18	21	
	底部	1					1		7	9	
小瓶	口縁部			1					13	14	
	胴部								18	18	
	底部		1						14	15	
皿	底部								2	2	
小皿	口縁部								1	1	
	胴部								1	1	
小杯	口縁部								22	22	
瓶	口縁部								1	1	
	胴部								1	1	
盃	口縁部								1	1	
	耳								1	1	
	底部								1	1	
酒器	底部								1	1	
鉢	口縁部								2	2	
	底部								1	1	
火炉	口縁部								2	2	
火入	口縁部-直形								1	1	
	口縁部								1	1	
急須	口縁部								2	2	
	把手								1	1	
	耳								1	1	
	底部								5	5	
蓋	口縁部								1	1	
	底～持								3	3	
	底								1	1	
	胴部								2	2	
袋物	胴部								1	1	
花生	口縁部								1	1	
小瓶	口縁部								1	1	
皿か鉢	底部								1	1	
甌	胴部								1	1	
器種不明	口縁部			1		1	1		121	124	
	胴部								1	1	
	底部										
合計		2	3	1	1	1	2	1	270	281	

表12 沖縄産無釉陶器出土状況

器種・部位	出土地	Bトレンチ				Cトレンチ		Nトレンチ		青大織物 基礎内	石器側面内	表土	表採	合計
		A・B・C Nトレンチ	表土	4層	サブ トレンチ	表土	表土	上層	表土					
皿	口縁部											1		1
蓋	口縁部											1		1
	胴部											3		3
鉢	口縁部	1										13		16
	胴部											8		8
籠り鉢	口縁部	1					1		1			9		14
	底部							1	1			1		1
甌	口縁部							1				2		3
	胴部							1				1		1
火炉	口縁部											1		1
	耳											1		1
	胴部											1		1
火取	底部											1		1
器種不明	口縁部		1	1	1	2						5		5
	胴部											73		78
	底部											2		2
合計		2	1	1	1	3	3	1	1	2	121	1		137

表13 土器・陶質土器・瓦質土器出土状況

種類・器種・部位	出土地	A+B+C Nトレンチ	Cトレンチ		表土	表土	合計
			表土	上層			
土器 (5点)	器種不明	胴部			2	3	5
	壺	口縁部				1	1
	鉢	口縁部				1	1
	鍋	把手 胴部	1			2	2
	楕木鉢	胴部				2	2
	急須	口縁部				1	1
	蓋	耳 縫み 底 底～持				1 3 1 1	1 3 1 1
	灯明具	口縁部				1	1
	口縁部		1			8	9
	器種不明	胴部 底部	2			100	102
瓦質土器 (3点)	合計		1	2	1	2	128
	器種不明	胴部				1	2
	合計						134

表14 錢貨・円盤状製品・銅製品・その他遺物出土状況

種類・器種	出土地	A+B+C Nトレンチ	Bトレンチ		Nトレンチ		石器類 溝内	表土	表様	出土地 不明	合計
			サブトレンチ	表土	上層	下層					
銅貨 (1点)	銅種不明				1						1
円盤状 製品	染付	1						1			2
	沖綱產施釉陶器							2			2
	沖綱產無釉陶器							4			4
	瓦							5			5
銅製品	合計	1	0	0	0	0	0	12	0	0	13
	丸灯							1			1
	裏黄						1	1			2
	めがねのつる							1			1
	器種不明							1			1
鉄製品	合計	0	0	0	0	0	1	0	4	0	5
	角鉄							1			1
	鉄津			1				8			9
	器種不明							2			2
プラスチック 製品	合計	0	0	0	1	0	0	11	0	0	12
	瓶(口縁部)							1			1
	器種不明							2			2
石製品	合計	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	規模材								43		43
	器種不明		1					2			3
ガラス片 白磁石 灰 燒土 モルタル	合計	0	0	1	0	0	0	2	43	0	46
	ガラス片(33点)							33			33
	白磁石(33点)		1			2			30		33
	灰(49点)							2	47		49
	燒土(141点)				1			1	126		141
	モルタル(1点)							1			1

表15 瓦・埠・漆喰出土状況

種類・色調	出土地	A+B+C Nトレンチ	Bトレンチ					Cトレンチ			Nトレンチ			石縫側(窓内)		大学建物 基礎内 表土	表土	合計	
			表土	1・2層		3層	4層	サブ トレンチ	表土	表土	上層	下層	下層	下層					
				1	2	3	4				5	6							
瓦	軒丸	灰色														2	2		
		赤色														2	2		
	軒平	赤色														2	2		
		灰褐色														6	6		
	明朝系 丸	灰色	1	5					1							22	29		
		褐色														9	10		
		赤褐色														3	3		
		赤色	1													3	75		
		灰褐色														75	87		
	明朝系 平	灰色	2	6	2		4			6	2					12	20		
		褐色		1	1					4	2	7				1	225	253	
		赤褐色								1		1				1	53	58	
		赤色	2	1			1			6	23	6				10	70	72	
		灰褐色														33	825	907	
明朝系 (鳥廻)	丸	灰色														5	5		
		赤色														1	1		
	平	灰色							2		3					44	49		
		褐色														15	15		
		赤褐色								1				1	1	42	45		
	赤色															7	7		
近世 瓦	明朝系 丸平不明	灰色			2		4									6			
		褐色					2									2			
		赤色	7		4					9	4					231	258		
	平	灰色														4	4		
		赤色														10	12		
	不明瓦	灰褐色														45	45		
	灰色									2						58	62		
埠	合計		5	9	15	2	9	7	29	38	23	0	5	13	39	1768	1962		
	灰色			1	1							1				56	59		
	赤色														1	5	6		
	合計			1	1							1			1	61	65		
漆喰 (14.8t)												12				2	14		

表16 貝類（巻貝等）出土状況

網名	科名	種名	生息地	出土地			Bトレンド			Cトレンド			Nトレンド			表土			合計			個体数	
							表土			下層													
				完形	破頂	破片	完形	破頂	破片	完形	破頂	破片	完形	破頂	破片	完形	破頂	破片	完形	破頂	破片		
腹足網	サザエ科	ヤコウガイ	1~4-a			1											21			22	1		
	サザエ科	ヤコウガイの蓋	1~4-a					1											1	1	1		
	オニツツノガイ科	ウミニアカニモリ	1~1-a													1			1		1		
	ソツボラ科	オハグロガイ	II-2~c					1								2			3		3		
		マガキガイ	I-2~c														1		1		1		
	タカラガイ科	ハナビシダカラ	1~1-a													1			1		1		
		タカラガイ科不明																	2	2	1		
	イモガイ科	ヤセイモ	1~2-a															1		1	1		
	イモガイ科	イボシマイモ	1~2-a														1		1		1		
	ヤマタニシ科	サヤガタイモ？															1		1	1	1		
		イモガイ科不明																2	1	2	1	2	
	サ貝目不明	オキナワヤマタニシ	V-8															1		1	1	1	
	合計			0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	6	6	31	7	7	33	17			

表17 貝類（二枚貝等）出土状況

網名	科名	種名	生息地	出土地			表土			合計			個体数								
							表土														
				完形L	完形R	破頂L	破頂R	破片		完形L	完形R	破頂L	破頂R								
海足網	イタヤガイ科	ウミギタガイモドキ							1	1				1							
	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2~c	2					1	3	1										
		ヒメツキガイ	I-2~c	1	2		1			4	3										
	シャコガイ科	シャコガイ科不明							1	1	1										
	マルスダレガイ科	メノメガイ	II-1~c						1	1	1										
		アラスジケマンガイ	III-1~c	1							1	1									
		ホソスジイナミガイ	II-1~e			1					1	1									
		ハマグリの一種							1		1	1									
		二枚貝不明								7	7	1									
	合計			4	3	1	1	11	26	11											

表18 ニワトリ出土状況

部位/保存部位	出土地			表土			合計			
	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	
	上顎骨				上顎骨			上顎骨		
上顎骨	F <sub>1</sub>			1			1			
頸骨				1			1			
合計				1	1		1			

表19 イヌ出土状況

部位/保存部位	出土地			表土			合計			
	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	
	中足骨			<th>第3近位端～骨体</th> <td></td> <td></td> <th>中足骨</th> <td></td> <td></td>	第3近位端～骨体			中足骨		
中足骨				1			1			

表20 イノシシ出土状況

部位/保存部位	出土地			表土			合計			
	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	
	上顎骨			<th>上顎骨</th> <td></td> <td></td> <th>上顎骨</th> <td></td> <td></td>	上顎骨			上顎骨		
上顎骨				1			1			

表21 種不明出土状況

部位/保存部位	出土地			Bトレンド			Nトレンド			表土			合計		
				4層			上層			表土					
	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明	L	R	不明
肋骨							1						1		
肩甲骨										1			1		
脛骨													1		
部位不明				1									10		12
合計				1						1	11		1	14	

表22 2011(平成23)年度遺物出土状況

種類・器種	出土地	トレンチ1		トレンチ2		表土	合計	重量(kg)
		表土	褐色	表土				
陶 磁 器	青磁					1	1	0.003
	中国磁 (5点)			1	1	1	1	0.002
	白磁						2	0.003
	染付			1			1	0.036
本 土 產	褐船							
	染付				2		2	0.004
	色絵	2					2	0.251
	磁器	22		10		17	49	0.598
沖 綱 瓦	陶器					1	1	0.049
	沖綱瓦	1	1	3	2		7	0.033
	施釉陶器	1	2	3	2		8	0.333
	無釉陶器							
陶質土器				2	1		3	0.021
鐵貨(1点)				1			1	0.001
金屬製品(1点)						1	1	0.783
鉄製品(1点)							1	0.030
ガラス瓶(1点)				1			1	0.002
プラスチック？(3点)						3	3	0.006
灰(5点)						5	5	0.004
タイル(1点)						1	1	0.004
石(1点)						1	1	0.016
器 形 物	瓦(24点)	8	2	3	11		24	6.989
	甕(2点)		1	1			2	0.508
遺 物 然 然	貝類(4点)	1		2	1		4	0.029
	脊椎動物骨体(3点)	1		2			3	0.011
合計		35	12	30	47		124	9.716

表23 中国産陶磁器出土状況

種類・器種・部位	出土地	トレンチ2		表土	合計
		褐色	表土		
青磁(1点)	器種不明	胴部		1	1
白磁(1点)	小杯	口縁部		1	1
染付(2点)	小杯	口縁部	1		1
	器種不明	胴部		1	1
褐釉(1点)	器種不明	胴部		1	1

表24 本土産陶磁器出土状況

種類・器種・部位	出土地	トレンチ1		トレンチ2		表土	合計
		表土	表土	表土			
染付(2点)	小皿	底部		1			1
	小杯	口縁部		1			1
色絵(2点)	皿	口縁～底部	2				2
磁器(近代)	碗	口縁部		10	1	4	15
				7		2	9
				3			3
	皿	口縁部			2	4	6
				1		3	3
				2		2	2
	小皿	口縁部		1			1
	小杯	口縁部		2			2
	器種不明	胴部	2	4	2		8
合計			22	10	17		49
陶器(1点)	器種不明	口縁部			1		1

表25 沖縄産施釉陶器出土状況

器種・部位	出土地		トレンチ1		トレンチ2		表土	合計
	表土	褐色	表土	褐色	表土	褐色		
甕	口縁部	1					1	1
	底部					1	1	
袋物	胴部			1			1	1
器種不明	胴部		1	2		1	4	
合計		1	1	3		2	7	

表26 沖縄産無釉陶器出土状況

器種・部位	出土地		トレンチ1		トレンチ2		表土	合計
	表土	褐色	表土	褐色	表土	褐色		
鉢	胴部	1			1		2	
横口鉢	胴部			1	1			2
器種不明	胴部		1	1	2		4	
合計		1	2	3	2		8	

表27 陶質土器出土状況

器種・部位	出土地		トレンチ2		表土	合計
	表土	褐色	表土	褐色		
火炉	胴部	1			1	
器種不明	胴部	1		1	2	
合計		2		1	3	

表28 銭貨・鉄製品・金属製品・その他遺物出土状況

材質・種類	出土地		トレンチ2		表土	合計
	褐色	表土	褐色	表土		
銭貨 (1点)	銭貨不明		1			1
鉄製品 (1点)	鉄針			1		1
金属製品 (1点)	サペル				1	1
ガラス瓶 (1点)		1				1
プラスチック製品? (3点)				3		3
タイル (1点)				1		1
石 (1点)					1	1
炭 (5点)					5	5

表29 瓦・埴出土状況

種類・色調	出土地		トレンチ1		トレンチ2		表土	合計
	表土	褐色	表土	褐色	表土	褐色		
瓦	丸	赤色	4		3	5	12	
	平	赤色	4	2		6	12	
合計		8	2	3	11		24	
埴		灰色	1	1			2	
合計		0	1	1	0		2	

表30 貝類（巻貝等）出土状況

網名	科名	種名	生息地	出土地		トレンチ2		表土	合計	個体数
				表土	褐色	表土	褐色			
腹足網	サザエ科	ヤコウガイ	1-4-a			1	2		4	1
合計				0	0	0	2	0	0	4
								0	0	1

表31 魚類出土状況

科・種名	出土地		トレンチ2		合計
	表土	褐色	表土	褐色	
科・種不明	主婦養殖		1	1	
合計		1	1		

表32 種不明出土状況

部位/残存部位	出土地		トレンチ1		トレンチ2		合計
	表土	褐色	表土	褐色	表土	褐色	
L R 不明			L R 不明		L R 不明		
部位不明		破片			1	1	2
合計					1	1	2

## 第7章 総括

今回の調査ではかつての松崎馬場の状況を確認するために、レンチ掘りでの遺構確認を行ったが、戦後の改変が著しい場所が見られたものの全体的に良好に残存していることが確認された。

まずは松崎馬場跡の造成時期についてであるが、2009(平成21)年度調査において最下層近くのVII層でグスク土器の小片が出土していることからグスク時代まで遡る可能性がある。他に出土遺物が見られなかつたため、詳しい年代については今後の調査成果によるところが大きい。

そして、その直上には道に伴う下部造成としての礫敷きがあり、その集石の上面から中国銭と中国産青磁が出土している。このことから16世紀以前には松崎馬場の西側縁辺部に道が通っていたことが想定される。この点については後ほど触れていくことにする。

IV層、V層は近世の造成層並びに床面である。とくにV層は30~40cmと厚く堆積しており、現状における平場域一帯に及んでいることからかなり大規模な造成を行っていることが分かった。この造成に関する記録としては1801年に現沖縄県立芸術大学当蔵キャンパスの場所に官僚養成機関として国学が首里王府により設置されたことに関係すると思われる。国学は松崎馬場の東側に隣接しており、その際に松崎馬場跡も同時に美観整備された可能性が指摘される。現在も国学・孔子廟の石躰を見ることができ、松崎馬場跡の東側を画しており、またこの石躰下部に設けられた石造りの排水溝の縁石上面は松崎馬場跡の床面に整合させている。これらのことから松崎馬場は国学の設置に伴って19世紀初頭に大きく改変したと考えられる。

そして、II、III層は近代以降の造成層並びに床面であり、1886(明治19)年に国学跡地に沖縄県師範学校が新たに設置されることと関係していると思われる。当該層は松崎馬場跡の主に学校側、つまり東側一帯にのみ確認されたことから、この時期において松崎馬場跡西側一帯は近代においてあまり利用されていないことが想定される。沖縄県師範学校の設置によって国学・孔子廟の石躰を横断する形で通路が新たにつくられ、通路の一部として利用された石躰に取り付く石段を現在も見ることができる。

以上のことから松崎馬場跡にはグスク時代、19世紀初め、そして近代の造成と3期の改変が窺われることが発掘調査から新たに確認できた。

そして、もう一つの大きな成果として松崎馬場跡の東端において宿道に関係する遺構が明らかにされたことが挙げられる。1989(平成元)年度調査でも道に伴う遺構が確認されているが、その後の概要報告において朝愛されているので、ここで詳しく触れていくことにする。

今回、確認された道は首里城を起点として平良橋、浦添グスク、宜野湾を経由して国頭へ至る国頭方西海道へとつながっていく宿道であり(図32,33)、古くは『琉球國由来記』卷3に記される永楽年間(1404~1425)に設置した「東西の道」が国頭方西海道(中頭方)に相当するとされている(沖縄県教育委員会1985)。

1593年に尚寧王が首里城から浦添グスクまでの間に新たな道の整備をしていることは『球陽』や『浦添城前の碑文』にある首里平良橋の設置から窺い知ることができ、先の16世紀以前とした道の下部造成とされる礫敷きや、舗装面、縁石はこの時期の宿道に比定することも可能である。また、1989(平成元)年度に実施された国学・孔子廟の発掘調査では16世紀にこの場所が生活の場として利用され始めるとしている(上原、島袋1991)。18世紀には勝連按司の屋敷があったことから、16世紀まで按司の屋敷が遡る可能性を提示しており、松崎馬場周辺もこの時期に大きく改変されたと考えられ、その際に道が整備されたとも想定することができる。

また同時に、1989(平成元)年度に検出された黄褐色の舗装面並びに縁石や2009(平成21)年度調査で検出されたNトレンチ9層、2011(平成23)年度調査で検出されたトレンチ1の3、4層そしてトレンチ

2で確認された道跡は松崎馬場跡東端を龍潭に沿って続いていることが軸線上において整合されることから、上記の遺構は同時期に構築されたものと考えられる。

図31は発掘調査で検出された道に関する遺構から、道のラインを想定したものである。これを見ると松崎馬場跡から龍潭へ下っていく斜面地に接するあたりに道が設置されていることが確認できる。国学・孔子廟の石牆側、すなわち西側には道の縁石や側溝と思われる石列が見られたが、龍潭側である東側には縁石などは今回、検出されなかった。それは2009(平成21)年度のNトレーニングと2011(平成23)年度トレーニング2の東端では戦後の搅乱層であるI層がV層の直上に堆積していることから、縁石が後世の搅乱により失われたと考えることができる。

最後に今後の課題として、松崎馬場には冊封使を歓待するための棧敷席が鹿龍船競争の際に設置されていたことか<sup>2</sup>『冠船之時御座構之図』に描かれているが(図4)、今回の調査ではそれに関連する遺構は検出されなかつた。調査区が極めて限られた範囲であることから、遺構にあたらなかつたか、冊封使の歓待時にのみ設置されたことから、かなり簡易な施設であることが想定されるため、遺構として残らなかつたことも考えられる。どのような施設であったのかは先の史料でしか窺うことができないため、今後の発掘調査で関連する遺構が残存しているかどうかは注目されるところである。そして、もう1つの課題として宿道のラインがどのように繋がっていくのかという点が挙げられる。今回の発掘調査の成果から見ると松崎馬場から龍潭へ下る斜面の縁から道に関連する遺構が検出されていることから松崎馬場の西側縁に沿って宿道が存在したものと考えられる。しかし、松崎馬場跡の北側においては縁が北側へ屈曲していることから、宿道も同様に北へ少し方向を変えるものと考えられる。その北側へ方向が変わる箇所がどの辺りになるのかについては今後の発掘調査成果に委ねることになる。松崎馬場跡にはまだ多くの遺構や遺物が埋蔵されており、今後も首里城公園の整備事業が継続していく中で、暫時明らかにされていくものと思われる。

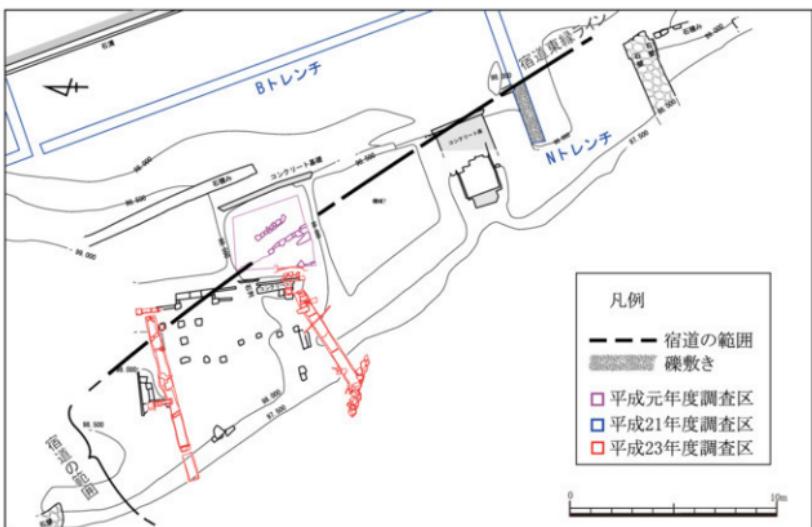


図31 松崎馬場跡内を通る宿道想定図



図32 首里古地図に見られる宿道



図33 宿道想定図並びに調査対象区域（太枠内）

【参考文献】

- 沖縄県教育委員会1985『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・中頭方西海道(1)・弁ヶ嶽参詣道—』  
沖縄県土木建築部1988『首里城公園基本設計』  
上原靜、島袋洋1991『首里国学・孔子廟跡の調査』『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員会文化課  
沖縄県教育委員会1995『龍潭・ハンタン山』『沖縄県文化財調査報告書』第122集  
国健、沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1995『国営沖縄記念公園首里地区計画・設計の記録』  
平凡社地方資料センター2002『沖縄県の地名』『日本歴史地名大系』第48巻 平凡社  
沖縄大百科事典刊行事務局1983『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社  
久手堅憲夫2000『首里の地名』第一書房  
福島清2005『国頭方西海道と比屋根坂石畳道』『沖縄の土木遺産』社団法人 沖縄建設弘済会  
沖縄県教育委員会2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』『沖縄県文化財調査報告書』第146集  
沖縄県立博物館・美術館2008『中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」』  
沖縄県立埋蔵文化財センター2010『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(1)』  
『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第53集  
上里隆史2012『琉球古道』河出書房新社  
総務省統計局HP([stat.go.jp/data/jinsui/index.htm](http://stat.go.jp/data/jinsui/index.htm))

報告書抄録

ふりがな	まつざきばばあと							
書名	松崎馬場跡							
副書名	県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1)							
卷次	一							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	山本正昭、羽方 誠							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	2017(平成29)年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○'○○"	東經 ○○'○○"	調査期間	調査面積	調査原因	
まつざきばばあと 松崎馬場跡	まつざきばばあと なほし 沖縄県那霸市 しゅわいじやく なはし 首里当蔵1丁 うめとうざう 1 うちめ ばん 目4番	472018	—	26° 13' 08	127° 43' 05	2009.11.04～ 12.04 2011.11.07～ 12.28	58m <sup>2</sup>	県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松崎馬場跡	道跡	近世～現代	石列、舗装面、礫敷き、集石	瓦、沖縄産陶器、中国産陶磁器、本土産陶磁器、円盤状製品、石造製品、錢貨、獸骨、貝類			平時は広場として使われていた松崎馬場における砂利敷きの床面と造成土が良好な状態で残存していることが確認された。また、宿道の一帯と思われる固く締められた床面も検出された。	
要約	松崎馬場は龍潭の北側に接する、松が植栽された広場で冊封使が来琉した際には龍潭で爬龍船競争を観覧するための棟敷席が設けられた。発掘調査では近世期に2度の造成が行われたことと、近代以降は機能しなくなってくる状況が窺えた。また調査区南端においては中頭、国頭方西海道へ繋がる宿道の縁石と舗装面も検出されており、主要道の造成状況が明らかにされた。							



---

---

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第91集

# 松崎馬場跡

—県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1)—

発行日 2017(平成29)年 3月 28日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7  
TEL:098-835-8751~8752

印 刷 新星出版(株)  
〒900-0001 沖縄県那覇市港町2丁目16番1号  
TEL:098-866-0741

---





沖縄県立埋蔵文化財センター